

ヴォルガ流域ドイツ人入植地の社会経済史

[課題番号 12630089]

平成12～13年度科学研究費補助金[基盤研究 (C)(2)]

研究成果報告書

平成15年3月

研究代表者 鈴木健夫

(早稲田大学・政治経済学部・教授)

I 研究の概要

(1) 研究種目・課題番号・研究課題

基盤研究 (C)(2)

12630089

ヴォルガ流域ドイツ人入植地の社会経済史——土地制度・農業経営を
中心に——

(2) 研究組織

研究代表者 鈴木 健夫 早稲田大学政治経済学部教授

(3) 研究経費

平成12年度 1,100千円

平成13年度 1,000千円

(4) 研究目的

18世紀末にエカチェリーナ2世が誘致して以降、ロシアのヴォルガ流域および南部に大量に入植したドイツ人は、当初は一定の特典を与えられた移住者として、19世紀中葉以後はロシア帝国臣民として、ロシア人やその他の少数民族との交流・抗争のなかで、独自の、ときに困難な社会経済生活を送った。彼らは、第1次世界大戦・社会主義革命・スターリン体制・第2次世界大戦そしてソ連邦崩壊のなかで、「ロシア・ソ連に住むドイツ人」としてシベリア・中央アジアへの強制移住やそこからの帰還などを経験し、数奇な運命を辿ることになるが、その社会経済生活は、ロシア・ソ連の激動のなかに埋没されていたといえる。本研究は、ヴォルガ流域のドイツ人について、入植当初から19世紀を経て20世紀初頭のストルイピン土地改

革・社会主義革命にいたる時期(1924年のヴォルガ・ドイツ人社会主義自治共和国成立まで)を対象とし、ロシア・ソ連史に埋没している彼らの社会経済生活を掘起こし、それが彼ら移民の歴史において、そしてロシア・ソ連史において、いかなる歴史的意味を内蔵しているかを考察するものである。ただし、ロシア・ドイツ人入植地に関する研究は、わが国はもとより国際的にも未開拓な状況にあり、最近活発化しつつあるロシア・ドイツ・アメリカ等における研究を参考にしつつ、当時の史料をロシア・ドイツ・アメリカの古文書館に探索し、蒐集する作業からはじめなければならない状況にある。したがって、本研究は、当初は具体的な検討課題として「ドイツ人入植への共同体的土地利用の導入」「ドイツ人入植地の共同体と農業経営の実態」「ストルイピン改革によるドイツ人入植地の土地整理」「ロシア革命とドイツ人入植地の農業経営」「大飢饉(1921-22年)とドイツ人入植地の農業経営」の5点を掲げ、それぞれの課題に関する資料の蒐集が重要な作業になったが、現段階の研究としては、上記のような未開拓な研究状況もあり、「18世紀末におけるヴォルガ流域へのドイツ人入植の開始」、「ドイツ人入植村ガルカ村の歴史」、そして「1921-22年の大飢饉とドイツ人入植地」の3点に問題の焦点を絞らざるを得ない

(5) 研究成果

《平成12年度》

平成12年8月15-31日にロシアのサラトフ市・エンゲルス市(国立サラトフ州古文書館・同分館)に、平成13年3月10-22日にドイツのシュトゥットガルト市(Bibliothek des Instituts fuer Auslandsbeziehungen)他に出張し資料蒐集。主としてロシア、ドイツ、アメリカで出版された関連研究文献を蒐集。早稲田大学中央図書館所蔵のゼムストヴォ文書(マイクロ資料)の検索。以上の資料を検討し、次の4点の研究成果を得た。①入植開始から1920年代初頭にいたる時期のヴォルガ流域ドイツ人の村落・人口・行政機構について、かなりの歴史学的情報を得た。②ヴォルガ流域ドイツ人入植地への共同体的土地利用の導入について、その略

史を知った。(3)ストルイピン改革によるドイツ人入植地の土地整理(区画地化)について、若干の地域の状況を知ることができた。④大飢饉(1921-22年)の時期のドイツ人入植地の状況について、若干の情報——主として食糧問題、アメリカ政府の援助——を得た。

《平成13年度》

平成13年7月14-23日にアメリカのスタンフォード大学フーヴァー研究所古文書館(Hoover Institute Archives、サンフランシスコ)に、平成14年3月17-24日にロシアのロシア国立図書館(Rossiiskii Gosudarstvennyi Bibliotek、モスクワ)と国際ロシアドイツ人文化歴史研究者協会(Mezhdunarodnaya assotsiatsiya issledovatel' I kul' tury rossiiskikh nemtsev)に出張・資料蒐集。早稲田大学中央図書館所蔵のゼムストヴォ文書およびその他の関連資料の検索。以上の資料を検討し、次の2点の研究成果を得た。①ヴォルガドイツ人入植地における1921-22年の大飢饉にたいするアメリカ(American Relief Administration)の食糧援助の実態(食糧の輸送、配給)について、若干の情報を得た。②ヴォルガ流域のドイツ人入植村ガルカ村(ロシア名称:ウスチクラリンカ村、サラトフ県)の歴史——18世紀末の入植開始から20世紀初頭まで——について、若干の情報を得た。なお、平成12年度にロシア・サラトフ市に出張した際に知己を得たア・ア・ゲルマン教授(A. A. German、サラトフ大学)の著書『ヴォルガドイツ人自治州 1918-1924 (Nemetskaya Avtonomiya na Volge, 1922)』の翻訳について著者の了解を得、作業を開始した。

以上の2年間の研究成果を踏まえ、上記の「研究目的」の最後に記したように現段階では「18世紀末におけるヴォルガ流域へのドイツ人入植の開始」(第1章)、「ドイツ人入植村ガルカ村の歴史」(第2章)、そして「1921-22年の大飢饉とドイツ人入植地」(第3章)の3点に問題の焦点を絞り、その研究成果を以下に報告する。た

だし、第1章は拙稿「近代ロシアへのドイツ人入植の開始」(拙編『「ヨーロッパ」の歴史的再検討』早稲田大学出版部、2000年2月)に、第2章は Max Praetorius, GALKA, eine deutsche Aussiedlung an der Wolga, Leipzig, 1912 に、第3章は A. A. German, Nemetskaya avtonomiya na Volge, 1918-1941, chast' 1, Avtonomnaya oblast', 1918-1924, Saratov, 1992 にその多くを依拠しており、本研究期間中に蒐集した資料の十分な消化・活用は、今後の作業として残されていることを付言しておかなければならない。

Ⅱ 研究の内容

序 「ロシア・ドイツ人」問題	8
第1章 ヴォルガ地域へのドイツ人入植の開始(18世紀末)	17
1 エカチェリーナ2世以前のロシアと外国人入植	17
2 エカチェリーナ2世の外国人入植政策	23
3 リューベックからサラトフへ	28
第2章 ヴォルガ中流域のドイツ人入植地ガルカ(ウスチークラリンカ)村	37
1 自然環境	37
2 村の創設	38
3 村の人口	39
4 農業	44
5 牧畜	49
6 葡萄栽培	51
7 手工業	52
第3章 飢饉(1921-22年)とヴォルガ・ドイツ人入植地	54
1 1921年春——危機の始まり	54
2 危機の進展	58
3 中央政府との交渉	61
4 1921年夏——飢餓状況・中央政府の対応・現地の飢餓者調査委員会	63
5 1921年秋の飢餓状況	72
6 国内からの食糧援助	75
7 疎開	76
8 外国からの食糧援助	78
9 援助物資輸送の諸問題	85
10 市場取引	87

11 飢饉の激化と播種作業——1922 年初頭——	89
12 危機の克服に向かって	92
13 重い食糧税負担	94
地図 1 ヴォルガ流域	
地図 2 サラトフ、サマーラ地方のドイツ人入植地	

序 「ロシア・ドイツ人」問題

1843年にロシアを視察旅行したプロイセンの官吏・農政論者ハクストハウゼンは、ドニエプル川流域を訪れて次のような一節をその『ロシア研究』に書き記している。

われわれは、いきなり西プロイセンのビスワ川流域にきたかのように感じた。すべてが故郷のドイツ風であった！人間とその性格、言語、衣服、住居、家具だけでなく、あらゆる道具や容器、家畜、スピッツやブードル、牝牛や山羊でさえ、ドイツ風であった。その上、ここに入植者は自然そのものを、この地方全体をドイツ的様相にしてしまいうことに成功している。当地の風景を描く画家はこの風景をまちがいなくドイツ的と呼ぶであろう。畑はドイツ風に区分けされて耕され、耕地と牧草地はドイツ的に垣で囲まれている。村々の建造物、その個々の農家すべての建物、庭、その区画、植物、野菜、なかんずくジャガイモ、すべてがドイツ風である！(1)

ハクストハウゼンは、ドニエプル川流域のメンノ派ドイツ人の入植地を訪れてかれらの伝統の堅持にひどく驚いたのであるが、これより半世紀後にも、ロシア入学者セミョーノフ=チャン=シャンスキーがつぎのように述べている。

ヴォルガ入植地のドイツ人は、その物質的・文化的な生活において、いわば国家のなかの国家をなしている。かれらはまったく独自の自立した生活をしており、宗教、言語、体形、建築物、衣服、農作業において周辺のロシア人とは区別される(2)。

「ロシアの歴史は植民された国土の歴史である」とは歴史家クリュチェフスキーの有名なテーゼ(3)であり、その入植の主役はもちろんロシア人自身であった。しかし、外国人による入植の、とりわけ南部・東部ステップ地域におけるその歴史的意義を無視することはできない。19世紀のロシアには、ドイツ人の他、スウェーデン人、ア

ルメニア人、ブルガリア人、セルビア人、ワラキア人、モルドワ人、ポーランド人、ユダヤ人、ギリシャ人等々の移民がみられ、宗教的にもドイツ北部のメンノ派教徒、モラヴィア兄弟団などによる入植地——とくにメンノ派のそれは大規模——が存在していた。帝政ロシアを視察した外国の旅行者の多くは、ハクストハウゼンだけでなく、外国人入植地に注目し、また、ロシア人自身にとっても外国人入植地は大きな関心事であったのである。

すでに 18 世紀末にパラスは、ロシアにおけるモラヴィア兄弟団のある入植村が非常に豊かであり、その住民は葡萄と桑の栽培・絹織物で良い生活をしているとし、カトリック教徒のドイツ人村はそれに劣ると記している(4)。また、1827 年にホルダーネスは、シュヴァーベン出身のドイツ人は貧しく大酒飲みであるが、ギリシャ人とメンノ派教徒は称賛すべきであるとし、とくにメンノ派教徒の勤勉さと宗教性を高く評価している。メンノ派教徒のそのような評価については、同じころ南ロシアを旅行したヘンダーソンも指摘しているが、先のハクストハウゼンも、「メンノ派は、勤勉、道徳、秩序によってどれだけのものをもたらしうるか、[ロシア]政府には標準となり、ロシア国民すべてにとって見本となるであろう」(5)と指摘している。こうして、外国人の記述のなかでは、たしかに一部にドイツ人入植者が他の外国人入植者に比べて劣るという評価もみられるものの、全般的には、ドイツ人とくにメンノ派教徒の入植地は目を見張る存在であった。このことは、ロシア人自身の目にとっても同じであった。とくに知識人のあいだには、大酒飲みで祭り好きで農業水準の低いロシア人にたいして、ドイツ人入植者は勤勉で道徳的で秩序あり、良い農業経営を行なうという評価が定着していた(6)。メンノ派教徒の耕作した土地を視察したクラウスは、1869 年の著書『われわれの入植地』のなかで、「以前には水もなければ森の灌木も生育しなかったステップに、あたかも魔法をかけたかのように次から次へと繁栄した入植地が生まれ、健康的な豊かな井戸水、果樹・桑の木・材木用樹木の林があり、よく耕された豊かな麦畑、雌羊の群れ、すぐれた品種の種々の馬と牛がみられる」(7)と書いている。

帝政ロシアに入植していたドイツ人は、このように高い評価を受けてはいたが、しかし、所詮、かれらは大国ロシアに住む民族的少数集団にすぎず、その隔離された豊かな生活によってロシア人からは反感を買い、「特権的な無用の寄生物」として非難されることさえあった。かれらの生活の歴史は常に苦難を伴い、かれらの運命は歴史の荒波に左右された。

ところで、近代ロシアへのドイツ人入植は、18 世紀末、エカチェリーナ 2 世による誘致政策(1762 年 12 月 4 日の布告および 1763 年 7 月 22 日の布告)によって開始された。1764 年と 1767/68 年のあいだのわずかな期間に、8000 家族、2 万 3000 人から 2 万 9000 人といわれるドイツ人がヴォルガ沿岸にやってきて、山側に 47 の、草地側に 59 の入植集落がつくられた(8)。また、南ロシアへはポーランドなどからとりわけ旧教徒が移住し、エリザヴェトグラード地方には 1764/69 年にその数 1 万 3079 人であったという(9)。その後、ロシア移民は一時期鎮静化した。それにはいくつかの理由があった。1768 年以後ロシアはトルコと戦争した。ドイツでは、皇帝ヨーゼフ 2 世が 1768 年、全面的な移民禁止令を発した。そして、ドイツの領邦君主も、ロシアへの入植を阻止しつづけた。しかし、それらは、移民の波をただ一時的に鎮静させただけであった。1770—80 年代には黒海北岸の全域がロシアの支配下にはいり、この巨大な新しい領土を守り、またそれを経済的に利用する人間が必要とされた。この約 800 万ヘクタールの地域には、ただ 19 万人しか住んでいなかったのである(10)。こうして、アレクサンドル・ポチョムキン侯の発議により、新たに移民が開始された。1781 年には約 1 千人のデゴ島のスウェーデン人がドニエプル川流域へ移住したが(11)、ロシア政府は、第 1 回ポーランド分割(1772 年)以降プロイセンの勢力下で困難な経済状況にあったダンツィヒに目を付けた。1786 年には約 910 人のダンツィヒ住民が南ロシアへの入植に向かったが、このダンツィヒには、土地の購入を拒否され、自らプロイセンの兵役と宣誓の義務を拒否するメンノ派教徒が将来の生活を憂慮しており、かれらメンノ派教徒がロシア政府との合意の下に大挙してロシアに移住

していった⁽¹²⁾。1796 年にはロシア帝国全土で 23 万 7100 人(全人口の 0・6%)のドイツ人が数えられているが⁽¹³⁾、エカチェリーナ 2 世治世の入植者数は少なくとも 7 万 5000 人といわれている⁽¹⁴⁾。

19 世紀に入り、アレクサンドル 1 世は、1804 年 2 月 20 日、新たに移民令の布告(マニフェスト)を発した。かれはそこで明示的に 1763 年の移民令を引き合いに出し、同じ特典をいくつか告げた。しかし、かれには、すべての移民希望者を受け入れる用意はもはやなかった。かれは、手本となるような農業・牧畜従事者と手工業者だけの移民を認め、さらにその希望者にたいしては、最小限 300 グルデン(雌牛 10 頭分の価値)の持参を要求した。この金額は、若干の家具、道具、衣類などを得るにはたしかにそれほど困難ではない額であったが、これによってドイツの最下層の貧民はロシアへの入植から排除されることとなった。また、政治的に疑わしい人間の国内流入を阻止しようとして、入植者に警察の品行証明書が要求されることがあった⁽¹⁵⁾。それでも、アレクサンドル 1 世の移民令は、ドイツ人の長期的なロシア移民をひきおこした。それは、いくつかの局面に分けてみることができる。1804 年から 1810 年にかけては、何千人ものドイツ人がまず南ロシア、クリミアを含む黒海沿岸地域に移住し、各人 30—80 デシャチナの耕地を手にした。次いで、1814 年から 1831 年にかけては、多数のドイツ人移民がベッサラビア、内カフカース・外カフカース地域にも入植した⁽¹⁶⁾。この間ロシア政府は、1819 年に、プロイセンのメンノ派など若干の人びとを除き外国人の集団でのロシア移住を公的に中止し⁽¹⁸⁾、1833 年には、ヨーロッパからの移住を最終的に阻止したが⁽¹⁷⁾、現実には移住の流れが全く止むということとはなかったのである。しかし、このアレクサンドル一世とニコライ 1 世の治世にはドイツ人の法的・行政的地位に変化がみられ、かれらの特権が少しずつ失われはじめた。そして、1858 年にドイツ人人口 84 万 300 人(全人口の 1・1%)を数えた⁽¹⁹⁾アレクサンドル 2 世の時代には、かれの改革によって、ドイツ人の特別の法的・行政的地位は撤廃されてしまうことになる。アレクサンドル 2 世の農奴解放と地方行政改革はロシア農民

の法的環境を改善したが、それは同時に、ドイツ人入植者の国家義務免除などの法的特権を廃止し、かれらをロシア帝国の臣民として位置付けることとなったのである。すでに 1860 年代にドイツ人入植者の不忠誠が指摘され、その後も反ドイツ人感情が消えることはなく、「ドイツ人問題」がひきおこされていた。そのような状況にあつて、ドイツ人のなかにはアメリカへ移住していく者もいたが、それはわずかであつた(20)。

1871 年 6 月 4 日の法律によって、ドイツ人入植者にたいする特別の行政が完全に廃止され、1874 年にはドイツ人子弟がはじめてロシア軍で兵役に服することになった。さらに、1881 年に即位したアレクサンドル 3 世は徹底したロシア化政策を遂行し、ドイツ人入植地においてもすべてにロシア語が強要された。当惑と失望に苦しむドイツ人入植者のなかにはアメリカ大陸へと移住していく者もあらわれたが、多くは困難な環境のなかでロシアに留まった。(21) 1897 年の最初の全ロシア帝国国勢調査によれば、出身からしてドイツ人である人びとは、カブザンの数字によれば 177 万 1300 人(全人口の 1.4%)数えられた(22)。

第 1 次世界大戦勃発とともに、ロシア領内のドイツ人はロシア軍のために戦い、ロシアのために命を落とす者も少なくなっただけでなく、スパイやサボタージュで告発される者もいた。学校や教会でロシア語が禁止され、ドイツ語の新聞の発行が禁止された。ドイツ人は危険とみなされ、ヴォルニニのドイツ人 20 万人のうちの半分以上は、1915 年の 2 月 2 日と 12 月 13 日の勅令により、「ロシア国家にたいする反逆罪」の故に土地を奪われ、シベリアへ追放された。

1917 年のロシア革命はドイツ人の強制移住・追放を中止したが、社会の混乱のなかでドイツ人村は略奪され、村人のなかには殺害される者もいた。1921—22 年の飢饉では 30 万人以上のドイツ人が死亡したといわれている(23)。

ただ、ソヴェト政府は革命後 1 年してヴォルガ・ドイツ勤労コミューンを形成し、さらにネップ期に入つて 1924 年 12 月にはヴォルガ・ドイツ自治共和国を成立させ、自治を認めた。しかし、スターリンの農業集団化によってドイツ人農民の土地・家畜は、ロシア人農民のそれと同様に、コルホーズへと没収され、コルホーズ加入を拒否する者は「クラーク」として追

放・清算された。ドイツ人の村では、それによって3分の1の家族が父親を失い、さらに1932—33年の飢饉では35万人の死者が出たともいわれている。1939年の独ソ不可侵条約は一瞬の友好を夢見させたが、1941年にドイツがロシアに侵入して独ソ戦争が勃発するや、ドイツ人は「裏切り者」の刻印を押され、1915年のドイツ人強制移住令が復活した。1941年8月28日のソ連邦最高会議議長による「ヴォルガ流域ドイツ人移住令」はかれらを中央アジアやシベリアに強制移住させ、かれらの自治共和国は消滅した。強制移住させられたのはヴォルガ流域のドイツ人だけではなく、クリミア半島、黒海沿岸、カフカース、ウクライナのドイツ人もまた、同じ運命を辿った。その数は全体で約65万人に達したという数字がある。その後、スターリン批判以後の1957、1964年にドイツ人は名誉を回復したが、ヴォルガ流域などへの帰還は許されなかった。そして、東西両ドイツ基本条約が締結された1972年以後、大量のドイツ人が西側へ出国することになる。他方、ペレストロイカ・ソ連邦解体の激動のなかで、ロシア各地に住み続けるドイツ系住民——ソ連邦解体前の1989年の人口調査によれば203万6000人——は結集し、自らの自治共和国の復活を要求する動きをもみせている(24)。

注

- (1) August von Haxthausen, Studien ueber die innern Zustaende, das Volksleben und insbesondere die laendlichen Einrichtungen Russlands, 2. Theil, Hannover, 1847, Reprint, Georg Olms Verlag, 1973, S. 171–172.
- (2) V.P. Semenov–Tyan–Shanskii I V.L. Lamanskii, Rossiya, polnoe geograkhicheskoe opisanie nashego otchestva: Srednee i nizhnee Povolzhe, SPb., 1901, str. vi; Judith Pallot/Denis J.B. Shaw, Landscape and Settlement in Romanov Russia 1613–1917, Oxford, 1990, p. 80. 所引。なお、先のハクストハウゼンは、ヴォルガ流域のドイツ人入植地はドニエプル川流域のメンノ派ドイツ人入植地ほどでなく、人間とその言語、衣服、習慣だけがドイツ的である、と記述している。August von Haxthausen, op. cit., S. 172.

- (3) B・O・クリュチェフスキー『ロシア史講話』(八重樫喬任訳)、1、恒文社、1979年、36-40ページ参照。
- (4) 当時、シチェルバトフは、多くのヴォルガ・ドイツ人が悪質であり、カルムイクが中国へ逃げていったのも彼らのせいであるとしているという。A.Klaus,Nashi kolonii,opyty i materialy po istorii i statistik inostrannoi kolonizatsii v Rossii,vypusk 1,SPb.,1869.Reprint with Introduction by R. B. Bartlett, ,Oriental Research-Partners,Cambridge,1972.
- (5) August von Haxthausen,op.cit.,S.196.
- (6) Judith Pallot/Denis J.B.Shaw,op.cit.,pp.79-81.
- (7) A.Klaus,,op.cit.,str.152.
- (8) Richard H.Walth, Strandgut der Weltgeschichte.Die Russlanddeutschen zwischen Stalin und Hitler,Tuebingen,1994,S.30;Dittmar Dahlmann/Raph Tuchtenhagen(Hg.),Zwischen Reform und Revolution.Die Deutschen an der Wolga 1860-1917,Koeln,1994,S.100.なお『ロシア史 2』(世界歴史大系。山川出版社)72 ページ(土肥恒之氏執筆)も参照。
- (9) Detlef Brandes,Die Ansiedlung von Auslaendern im Zarenreich unter Katharina II.,Paul I. und Alexander I. . Jahrbuecher fuer die Geschichte Osteuropas,34,1986,S.167.
- (10) Lothar Dralle, Die Deutschen in Osteuropa.Ein Jahrtausend europaeische Geschichte, Darmstadt,1991,,S.140-141.
- (11) Detlef Brandes,Die Ansiedlung von Auslaendern im Zarenreich unter Katharina II.,Paul I. und Alexander I. .,S.169.
- (12) Ibid. A.Klaus,op.cit.,str.116-118.Detlef Brandes,Die Ansiedlung von Auslaendern im Zarenreich unter Katharina II.,Paul I. und Alexander I. .,S.169-170,172,179.Id., Von den Zaren adoptiert.Die Deutschen Kolonisten und die Balkansiedler in Neurussland und Bessarabien 1751-1914,Muenchen,1993,S.42-47.
- (13) V.M.Kabuzan, ,Zahl und Siedlungsgebiete der Deutschen im Russischen Reich (1796-1917), Zeitschrift fuer Geschichtseissenschaft,32,1984,,S.868,873-874.

- (14) A.Klaus,op.cit.,Introduction.メンノ派教徒・ドイツ人の入植地における農業経営については多数の文献があり、以下には筆者の手元にあるもののいくつかを挙げておく。A.M.Egorev,Opisanie khozyaistva menonitov,Trudy Imperatorskogo Moskovskogo Obshchestva Sel'skogo Khozyaistva:Prilozhenie k V vypuski,M.1881;I.Krasnoperova,Menonitskoe khozyaistvo v Samarskom uezd,Russkaya Mysl',god chetvertyi,kniga X,1883; Lev V. Malinovskii,ekonomicheskoe i sotsial'noe razvitie kolonistskoi derevniev yuzhnoi Rossii v pervoi polovine XIX v.,Istoricheskie Zapiski,109,1983; On zhe,Obshchina nemetskikh kolonistov v Rossii i ee regional'nye osobennosti XIX-nachale XXveka;Lev Malinovskij, Die Eigentumsformen bei den russlanddeutschen Bauern im 18.und 19.Jahrhundert und ihre Bedeutung fuer die wirtschaftliche Entwicklung der deutschen Siedlungen, in : DittmarDahlmann/RaphTuchtenhagen(Hg.),op.cit. Cornelius Krahn,Agriculture among the Mennonites of Russia,Mennonite Life,vol. X.1966(この論文は松井憲明氏よりご教示を受けコピーを頂戴した).James W. Long,Agricultural Conditions in the German Colonies of Novouzensk District,Samara Province,1861-1914,The Slavonic and East European Review,vol.57,No.4,1979.Id.,From Privileged to Dispossessed.The Volga Germans,1860-1917,Lincoln/London,1988.
- (15) Lothar Dralle,op.cit.,S.143. Detlef Brandes,Von den Zaren adoptiert,S.70-71. Richard H.Walth,op.cit.,S.30-31.
- (16) Lothar Dralle,op.cit.,S.143,145.
- (17) Detlef Brandes,Die Ansiedlung von Auslaendern im Zarenreich unter Katharina II.,Paul I. und Alexander I.,S.165. Id.,Von den Zaren adoptiert, S.123.
- (18) A.Klaus,op.cit., Introduction.
- (19) V.M.Kabuzan,op.cit.,S.868.
- (20) Ibid.,Introduction.

(21) Dittmar Dahlmann/Raph Tuchtenhagen(Hg.),op.cit.,S.100–101.Richard H.Walth,op.cit.,S.33.

(22) V.M.Kabuzan,op.cit. S.870,872.Lothar Dralle,op.cit., S.146.

(23) 信頼できるとされるエドガー・グロスの著作(1926 年)によれば、ヴォルガ・ドイツ人だけで 4 万 8000 人の死者を出したという。James W.Long, The Volga Germans and the Famine of 1921, The Russian Review, vol.51,1992,p.523.

(24) Richard H.Walth,op.cit., S.33–38.『ロシア・ソ連を知る事典』(増補版、平凡社、1994 年)「ドイツじん」(中井和夫氏執筆)。

第1章 ヴォルガ地域へのドイツ人入植の開始(18世紀末)

1 エカチェリーナ2世以前のロシアと外国人入植

(1) ロシアへの外国人移住

ロシア史におけるヨーロッパ人の登場は古く、「ヴァリヤーギ招致伝説」やバルト・ドイツ人との交流・抗争の他、ノヴゴロドのハンザ商館やモスクワ公国時代および「動乱の時代」後のモスクワ外国人居留地「ドイツ人村」⁽¹⁾の存在などがその歴史的役割を象徴しているが、なによりもピョートル1世以後、政府は行政・経済などあらゆる分野で外国人の助力を得つつ国の近代化を推進したことは周知の事実である。ピョートルは、すでに1702年に外国人誘致令を発し、軍人と並んで商人・職人を全ヨーロッパから集めようとした。その際、ロシアに移住する外国人の信教の自由はそれまでと同様に保証することが確認されたが、その他、かれの治世においては、外国人には出入国の自由が認められ、また、商人には相互取引によって、企業家には1723年の産業規則によって、かれらの権利が保証された。このピョートルの外国人政策はかれの死後も継承され、両首都をはじめロシア国内には多数の外国人社会が生まれたのである⁽²⁾。

ところで、18世紀初頭には、ヴォルガ下流域の葡萄栽培に適したアストラハン周辺地域にヨーロッパの葡萄栽培専門家が招致されている。すなわち、1710年にはオランダのロシア領事を通じて二人のフランス人(ヴァンサン・ポシエとジャン・プラシュ)が誘われ、翌1711年3月にはマインツから5人のドイツ人誘致の合意がなされた。1709-10年のライン中流域では戦争の惨禍と不作のために多数の葡萄栽培者は生計の基盤を失い、容易に他国へ移住する用意があったという。さらに翌1712年にはピョートル自身が徴募した専門家がアストラハンに送られた。先のポシエは40年もの長きにわたってそこに留まることになるが、この地域で栽培された葡萄による葡萄

酒は、のちにエルベ・ワインやウンストルト・ワインと比較されるようになる。ちなみに、この地域は、同時に、ペルシヤとの戦争の拠点であり、またタタール人・バシキール人・キルギス人・カザフ人・カルムイク人などの遊牧民の来襲にたいする要塞の地域でもあり、さらにはオレンブルクとアストラハンそれぞれを重要な中継点とする、アジアとの二つの通商路にあたってもいた。ピョートルは、軍事的入植を推し進めるとともに、キリスト教徒——トルコ人に抑圧されていたセルビア人やグルジア人など——をこの地域に農業入植させようとし、他方、カスピ海経由の東方貿易の多くを掌握するアルメニア人のアストラハン進出をも支援した。アストラハンのアルメニア人入植者の数は18世紀中葉には1500人を超えたといわれている(3)。

黒海の北岸・西岸も重要な通商路であり、早くからアルメニア人やギリシア人などが移住していたが、この地域はいうまでもなく軍事的にも重要で、ピョートルの時代にとくにオーストリア領内から軍勤務——たとえば1711年のプルーツ河畔の戦い——のために呼び寄せられたセルビア人は、そのままここに定住した。オーストリア領内のセルビア人は、ピョートルの晩年にさらに徴募され、ロシア軍の軽騎兵連隊として重要な任務を負ったが、かれらは、ロシア政府から特権を享受しつつ国境防備のために強制的に、あるいは自ら進んでウクライナに入植していった。オーストリア継承戦争の終結後の1748年にウィーン政府は国境兵士のセルビア人の権利を削減していたが、そうした事情に加えて、ロシアが自分たちと信仰を同じくするギリシア正教徒の国であるということも、かれらのウクライナ移住を促す要因の一つとなったと考えられる。セルビア人にブルガリア人、マケドニア人、ワラキア人なども加わって建設された軍事・農業入植地域は「新セルビア」(ノーヴァヤ・セルビヤ)(ドニエプル川の西)と「スラヴ・セルビア」(スラヴァノ・セルビア)(ドニエプル川の東)と名付けられた。エリザヴェータ女帝のロシア政府も、軍事的・経済的考慮から南部ロシア入植の計画を積極的に推し進めた。しかし、ロシア政府がこの入植地域防御のために要塞「聖なるエリザヴェータ」の建設を開始したとき、それに脅威を感じたトルコは抗議した。セルビ

ア人の軍事的なウクライナ入植は、ロシア政府にとっては大した成果を得ずに終わり、1763-64 年にはその植民地の自治は廃止され、1764-65 年には「新セルビア」と「スラヴ・セルビア」はともに新設の「新ロシア県」の一部となり、それはその後 1783 年にエカチェリノスラフ管区となった。セルビア人に続いてモンテネグロとダルマチアそれぞれの司教からロシア入植の申し出があり、前者は 1754-58 年に 1500 人（他民族を含む）ほどが公的援助を受けて入植したが、ロシア政府の政策によりオレンブルクその他に散在して入植させられた人びとは長続きせず、ロシア軍の勤務に入る者が多かったという(4)。

このような状況のなかで、ロシア国内には、ヨーロッパ人を大規模に入植に誘致しようといういくつかの計画が登場した。

(2) ヨーロッパ人入植誘致計画

ピョートル大帝の娘エリザヴェータ女帝（在位 1741-61 年）の治世には、すでに述べたようにウクライナへのバルカン諸民族による軍事的入植が推進されたが、同時に、この時代には、ヨーロッパ人をロシアへ入植させようという、いくつかの計画案が登場した。

a ラフォンのユグノー派教徒入植計画

フランスでは、カトリック聖職者による改宗の強制と役人による圧迫とに抵抗するユグノー派教徒にたいして厳しい迫害が続いていたが、その迫害は、1752 年にあらたな頂点に達していた。この年の 6 月 8 日、ウクライナでロシア憲兵管区隊長として勤務していたプロテスタントのフランス人准将ラフォン（Brigadier de Lafon）は、エリザヴェータ女帝の官房長ベストウシェフ＝リューミン（A.P.Bestushev-Ryumin）に次のような提言をおこなった。すなわち、フランスの、とくにラングドック、ニーム、カルカソンヌといった都市のユグノー派教徒の絹織物生産者・毛織物生産者をロシアに移住させること、かれらは故郷では迫害に曝されており、他方、ロシア帝国においてはかれらは歓

迎されるにちがいない、と。ベストウシェフ＝リューミンは当時もっとも影響力をもった人物であったが、この官房長は委員会を組織してこの提言を検討し、それを受け入れるという結論を得た。かれは、ユグノー派教徒をヴォルガ流域のアストラハン周辺に入植させ、とりわけ絹織物生産と葡萄栽培に従事させようと考えた。蚕飼育に必要な桑の木がアストラハン周辺に十分に繁茂しない場合にはペルシヤから原料を取り寄せ、建設予定のユグノー派入植地で加工させるべきであるとした。こうして、かれは、外国人入植者をロシアへ呼び寄せることに同意したのであるが、7年戦争の勃発(1756年)はこの入植計画を挫折させた。しかし、この計画は、国境防備というよりは経済発展に寄与する手段として外国人入植を構想している点で、それまでにない方針がみられたといえる(5)。

b ザクセンの將軍ヴァイスバッハのロシア移住計画

ザクセンの將軍ヴァイスバッハ(Weisbach)は、7年戦争の最中の1758年、フリードリヒ2世の仮借ない徴兵を避けるべくプロイセンからポーランドに逃亡していた農民・兵士をウクライナに移住させようとして、ロシア政府に提言した。そこには、ロシアとオーストリアの共通の敵プロイセン王フリードリヒ2世にたいして人的・財政的損害を与えるとともに、ロシアには入植者の軍事的(国境防備)・経済的効用をもたらすという意図があったが、その際、信教の自由、独自の裁判と選出の長による行政、六年間の免税、兵役・軍馬提供義務からの解放、火酒・ビール製造権などを入植者に認めることを条件としていた。トルコ人やタタール人との穀物取引は入植者がおこなってもよいとされた。しかし、このヴァイスバッハの計画は採用されることはなかった。戦費に大きな負担を強いられたロシアの国家財政にその原因があったとされている(6)。

c ラリヴィエールの申し出による入植案

1756-57年にロシアのフランス人将校ラリヴィエール(de Lariviere)という人がロシア軍の軍馬購入のためにドイツに派遣されたが、そこで、かれは、戦争で貧窮した1

千のドイツ人家族がロシアへの入植を望んでいることを知った。かれはウィーンのロシア公使カイザーリンク(Keyserlingk)伯にそのことを伝えたが何らの指示も得られず、その情報はロシア政府に送られた。しかし、ロシア政府もすぐには検討しなかった。3年の歳月が流れ、ラリヴィエール自身帰国していた1759年になって、政府は帝直属諮問会議(5月2日)を開き、次のようなことを決議した。すなわち、ドイツにおけるロシア移住希望者はロシアの公使に申し出ること、ロシア帝国における信教の自由は保証し、農村に定住したいというかれらの要望は歓迎するということをかれらに伝えること、かれらには土地を与え、何年間かは完全な租税免除があること、しかし困難な戦争の継続によって移住資金の前払金を出せないこと、ラリヴィエールは時々その滞在地から実情を報告すること、である。このような組織的な大量入植の計画は、結局実現されずに終わったが、それでも帝直属諮問会議の決議は、その後のロシア政府の入植政策を方向づける条件を設定していた(7)。

d リーフラントの牧師アイゼンの入植計画

エリザヴェータ女帝死後のピョートル3世(治世1761-62年)治下の1761年にも、一つのヨーロッパ人入植計画がロシア政府に届けられた。

1745年以来リーフラントのトルマでルター派牧師をしていた中部フランケン地方ボルジンゲン出身のアイゼン(Johann Georg Eisen)は、文字通り「啓蒙時代」の子供であった。農業改良に関心をもち、野菜の乾燥化というかれのアイデアは「乾燥シチュー」を生み、それはヨーロッパ中で有名になったといわれる。しかし、かれは、なによりも農奴の境遇改善を意図し、1762年初めにはリーフラントの農奴解放案を政府に提示し、ロシアの農奴解放論の先駆者の一人となる人物である。このアイゼンを動かしたものに植民計画がある。かれは、自由な農民社会を実現するための手段として外国人の入植を考え、ヴォルガ流域、とくにカザンへの入植をも提言した。ピョートル3世は、このアイゼンの提言に関心を示しつつも、ロシアにおけるドイツ人兵力の増加を期待し、「いかにしたらリーフラントにドイツ人を入植させ得るか、その計画の

作成にかんする命令」を出しただけであった。アイゼンの入植計画の意図と帝のそれとは大きな隔たりがあったのである。アイゼンの計画は何の実も結ばなかったが、後年のエカチェリーナの入植計画につながる要素を内包していた(8)。

● ロモノーソフの主張——ロシア人による人口増加奨励論——

先にみたように、17、18 世紀の西ヨーロッパ諸国では人口増加奨励論が盛んに展開されていたが、その議論は、ロシアにも徐々に影響を及ぼしていた。

ロシアにおける国土の規模(広大)と人口の規模(希薄)との不均衡は、18 世紀にはますます問題とされていた。ピョートル 1 世による近代化の諸改革は、兵力・徴税力・労働力の拡大を前提としており、より大規模な人口増加の必要を認識させた。領土拡大と農奴制強化とは有用な経済的側面をもっていたが、同時に人口問題の重要性を提示することにもなった。こうして、18 世紀中葉には、ロシア国内でも人口増加奨励論が登場した。タチシチェフは、国富の第一の源泉として「国民の増加」を挙げた。1754 年にはこの問題は元老院でも提起され、元老院は「国民の維持にかんする」提案を検討した。しかし、西ヨーロッパでみられたような人口増加奨励論を本格的に論じたのは、ロモノーソフである。

著名な啓蒙思想家ロモノーソフ(Mikhail Vasil' evich Lomonosov)は、当時の西ヨーロッパの人口増加奨励論にも十分に通じていたが、七年戦争の時期にはロシア帝国の人口増加実現について検討し、そして、1761 年 11 月 1 日付シュヴァーロフ(Ivan Ivanovich Shuvalov)伯宛書簡という形態をとった著作——それはその社会批判の故にその後 100 年以上ものあいだ検閲によって公表が差し止められた——のなかで、かれの人口論を展開している。この著作は、その序文にあるように、「国富増進にかんする自分の見解の古い覚書」を示しており、8 項目ある第 1 項目が人口問題にかんしてのものである。かれは、そこで、「ロシア国民の維持と増加にこそ国家の偉大さ・強大さ・富があるのであり、その領土の広大さにあるのではなく、住民なしには無用である」と主張する。人口増加のためにかれは 13 点の措置を挙げているが、そのうち

最初の 10 点は社会的・医療的措置——結婚・出産、幼児死亡防止、医療、疫病原
因調査にかかわる改善措置——であり、次には喧嘩・掠奪に伴う死亡防止措置と逃
亡者にたいする措置が検討され、そして最後に、外国人受け入れの措置が提言され
ている。ロモノーソフは、そこで、戦争の災禍にあるヨーロッパからのあらゆる民族の
難民を広大なロシア帝国は受け入れ養うことができる、という考えを示した。それは、
戦時中の難民の受け入れという明確な目的をもった外国人入植案であったが、幅広
い視野をもった人口増加奨励論としてその後に影響力をもったのである(9)。

2 エカチェリーナ 2 世の外国人入植政策

(1) エカチェリーナの方針

1744 年にドイツからロシアにやってきたアンハルト・ツェルプスト公家出身のエカチ
ェリーナは、翌年にピョートル 3 世と結婚したが、すでに大公妃としてヨーロッパの啓
蒙思想家や国家理論家の著作に親しんでいた。そして、7 年戦争の最中の 1758 年
から 1761 年にかけての時期に、かの女は、その「覚書」のなかでつぎのようなことを
記している。すなわち、「この広大な帝国は植民を必要としており、荒廃のままにさせ
てはいけない。わが広大な荒地を生き生きさせるのだ。」そのためには人口の増加
が必要であるが、かの女は、その際、「人口増加のためには一夫多妻が有効であ
る。」ともいっている。当時、ヨーロッパには、先に紹介した官房学派の人口増加奨励
論・外国人入植誘致論も確かな地歩を占めていた。ただ、外国人入植者誘致にたい
しては、それを警戒する議論もあった。たとえば、ドイツの人口統計の創始者の 1 人
ズュースミルヒ (Johann Peter Smilch) は、2 人の外国人入植者より 1 人の自国の臣民
のほうがよい、なぜなら、自国の臣民は国の慣習を信じ、戦時には自分の「祖国」を
懸命に助けるだろうから、と考えた。しかし、エカチェリーナは、そうした警戒の議論よ
りは積極的な議論を受け入れ、またプロイセン、オーストリア、デンマークの経験に

学び、国の富と力を——そしてかの女自身の栄光を——増進させるものは人口増加であると考えていた。エカチェリーナは、人口増加奨励論の確固とした信奉者となったのである。そして、かの女のこの人口増加奨励論は、ロモノーソフに続くロシア教養層の人びとの支持をも広く得つつあった。かの女は、1762 年 6 月末に夫ピョートル 3 世が暗殺されて即位してまもなく、神に託された自分の国の「平穏と繁栄」と人口増加とのために尽力する、ということを強調していた。このかの女の意志は、その治世の初期の公示のいくつかで示した野心的な計画となり、具体的には、保健省の創設、捨て子養育院の設立を実現し、病院・薬局を設置し、医者・助産婦を教育し、そして、外国人入植に積極的に取り組むことになったのである⁽¹⁰⁾。

(2) 1762 年 10 月 14 日の元老院宛勅令と同年 12 月 4 日の布告(マニフェスト)

1762 年 10 月 14 日、エカチェリーナは、元老院にたいして次のような勅令を発した。

ロシアには、荒れ果てた、住む人のいない土地がたくさんあるので、そして多くの外国人がこのような住む人のいない土地に入植したいと余に請願しているので、余は、この勅令により、元老院が、法に従い、外務省と協議しながら——というのもこれは政治問題である——、今後入植したいと望むすべての人びとを、ユダヤ人を除いて、余への報告なしに受け入れることを許可する。余は、これによって、やがて神とその正教の栄光とわが帝国の安寧が増すことを期待する。⁽¹¹⁾

ここで、エカチェリーナの組織的な外国人入植政策の具体的な第一歩が踏み出されたのである。

勅令にみられるように、ユダヤ人が明確に誘致から除外された。ただ、エカチェリーナは、この勅令に補足して、かつて隣国に移住したような「あらゆる種類のロシア人移住者にも適用せよ」という指令を発しており、これには、当然、政府から迫害されて

ポーランドに避難していたが帰国を希望している「旧教徒」もその対象とされた。

元老院は、各省庁にたいして、ロシア国内の外国人入植の現状と問題点について、そして処女地についてその調査があるかどうかを検討させ、外務省にたいしては、「ロシアへの入植のために、ユダヤ人を除く外国人の、そしてとくに製造業者と職人の徴募事業に最大限の努力をするように」と伝えた。元老院にはいくつかの報告書が届けられたが、しかし、思うようには事は運ばなかった。

そうこうするうち、同年 12 月 4 日、エカチェリーナは、先の元老院宛勅令を若干一般化して、しかしほぼ同じ内容のもので「布告」(マニフェスト)を発し、外国人入植者への歓迎と保護、および帰国するロシア人逃亡者の赦免を公表し、元老院に詳細な計画の作成を命じた。そして、かの女は、その後すぐに、自分の側近であるグレーボフ (Aleksandr Glebov) にたいして、「この布告をあらゆる言語に翻訳し、あらゆる外国の新聞に掲載するように」と命じた⁽¹²⁾。

12 月 12 日には元老院会議が開かれたが、エカチェリーナは、この会議に訓令を送り、そこで、さまざまなタイプの職人・熟練労働者を徴募すること、かれらの移住先は特定の場所だけでなく、かれらの希望にしたがってロシアのどの町でもよいこと、を指示している。

布告のコピーは、12 月末になってようやくロシア国内の地方当局に送られ、外国のロシア公使には翌 1763 年 1 月 7 日付で外務省から発送された。

しかしながら、この最初の入植誘致令は、後述するように、たしかにヨーロッパ諸国に若干の反響をひきおこしたものの、エカチェリーナが期待した成果をもたらすことはなかった。当時の西ヨーロッパが先のみえない戦争中(7年戦争の最後の年)であったこともあるが、ロシアへの移住がどれほどの利益をもたらすか、布告の内容からはあまりに不明瞭であったからである。外国人にたいしてさらなる誘致令が必要とされた⁽¹³⁾。

(3) 1763 年 7 月 22 日の布告(マニフェスト)

7 年戦争の講和が 1763 年 2 月 15 日にフーベルトゥスブルクで結ばれて 5 カ月後、エカチェリーナ女帝は、7 月 22 日、より内容の明確な、そして非常に詳細な新たな外国人入植誘致の布告⁽¹⁴⁾を発した。この布告は、その実施の実態がどうであったかは別にして、その後アレクサンドル1世の外国人移住令(1804 年)までの 41 年間、ロシア政府の外国人入植政策の基礎となるものであった。

新しい布告は、まず、すべての外国人の入植を自由と認め(第 1 条)、先の布告にあったユダヤ人への言及は姿を消した。入植を希望する人びとは、どの国境からでも入国することができるとされ(第 2 条)、ロシアへの移住の資金をもたない人びとにはロシア政府から費用の援助がなされることが約束された(第 3 条)。入植者は、国内のどこに定住してどのような仕事をしたいのか、自分で自由に選択することができ(第 4 条)、国境から入植地までの旅費は無料とされ、その間の食費等も支給されるとされた(第 6 条第 8 項)。ロシア到着後 6 カ月間は無料の宿舎の提供が、そして自立するまでは必要な援助が約束された。土地が付与される他に、住宅建築、家畜や道具——農業用であれ手工業用であれ——の調達にたいして資金の貸付が、10 年間は無利子で(しかし 1 回の返済で)、その後も 3 年の年賦という好条件で認められた(第 6 条第 2—4 項)。入植者が持参する財産には関税がかけられず、また、一家族当り 300 ルーブリまでは販売用商品が無関税で持込むことが、少なくとも 10 年のロシア滞在を条件として、許された(第 6 条第 6 項)。そして、入植者に保証されるさまざまな特権が列挙された。

入植者には信教の自由が、それまでの教会規則と慣習とともに保証され、修道院設立・布教は禁止されたものの、定住するところどこでも教会と鐘楼を建設することが許された(第 6 条第 1 項)。一定期間は国家へのあらゆる租税が、誰も住んでいなかった土地に入植する場合には 30 年間、都市に定住する場合には、ペテルブルクとその周辺およびモスクワなどでは 5 年間、その他の地方都市では 10 年間免除

され、また、その他の非軍事的勤務義務・兵役・軍宿舎提供義務も、地方的義務を除いて免除された(第6条第2、7項)。かれらが自分たちで独立した入植地を建設した場合には、その自治を認め、かれらが望むならば軍事的保護を与えるとした(第6条第5項)。入植者にたいしては、「穀物耕作その他の手仕事、あるいは製造業、工場、施設に導くような企てすべて」にたいして国家の支援が約束されたが、特別の保護が与えられたのは、それまでロシアには土着のものがなかった工場と施設であり、工場・製造所を創設し、そこで「そのときまでロシアに存在しなかった商品」を生産した外国人にたいしては、かれらの生産物の輸出の際の無関税が10年間認められた(第6条第9項)。独立した企業家には、その労働力として農奴を購入する権利も与えられた(第6条第10項)。最後に、入植地ではどこでもその住民は随意に市・年市を開くことが許され、またその際のいかなる税支払義務もないということが約束された(第6条第11項)。

以上のような特典は、入植者本人だけでなくその子孫にまで適用されるとされた(第7条)。入植者は、ロシア到着後にツァーリにたいする忠誠の宣誓を義務づけられたが(第5条)、その後に帰国を希望した場合には、ロシアで獲得した財産の一部——その規模はロシアに滞在した期間による——をロシア政府に引渡すという条件で、認められた(第9条)。なお、上述の条件に不満足な人びとにはロシア政府と交渉する余地が認められていた(第10条)(15)。

この1763年7月22日の布告には、その後いくつかの補則が付されたが、そこで重要な点は、入植候補地が指示されたことである(16)。それは、前年の12月4日付勅令で旧教徒に提示された地域と同じで、その大半はサラトフ周辺のヴォルガ流域であった。エカチェリーナは、外国人の製造業者や営業者はロシアに未知の技術をもたらすはずであるとして、かれらの移住の経済的効用を評価していたが、同時に、いやむしろそれ以上に、外国人農業入植者の役割を、ロシア人に進歩的な経営・技術を伝える農業指導者として、大いに期待したのである(17)。

こうして、エカチェリーナ 2 世は、非常に寛容な条件を提示して、外国人入植誘致令を発布したのであるが、その布告は、それまでのロシアへの入植計画、あるいは西ヨーロッパ諸国の外国人入植計画——たとえば 1748 年 11 月 29 日付のデンマーク王フリードリヒ 4 世の布告など——を受け継いだ面もあるものの、外国人の、とくにヨーロッパ人の農業入植を本格的に計画したことは、それまでのロシアの歴史にはない、画期的といえるものであった。エカチェリーナは、1763 年 7 月に外国人入植事業を専門に担当する外国人保護局を創設し、グリゴリー・オルロフ伯 (Grigori Grigorievich Orlov、オルロフ五人兄弟の 1 人) をその長官に任命し、いよいよ計画の実行に乗り出していくのだが、この外国人保護局が 1763 年の 10、11 月に諸外国駐在のロシア公使に宛てた回状においては、「ロシアの処女地には農民こそ必要である」と強調され、農業入植を外国人入植の中心に据える方針が明確にされたのである(18)。

3 リューベックからサラトフへ

(1) ロシアへの出発地リューベック

ロシアへ向かう最初のドイツ人入植者は、一部はダンツィヒから出発したが、その多くはリューベックあるいはハンブルクを出発地とし、なかでもリューベックはその中心であった。リューベックは、入植者の国内輸送の終点となり、かれらは、そこでしばらく待機して乗船し、バルト海を航行し、ペテルブルクのフィンランド湾要塞港クロンシュタットに向かったのである。陸路によるロシアへの移民は、プロイセン王とザクセン選帝侯が国内通行を拒んだので阻止された(19)。

民間の徴募業者ル・ロイがレーゲンスブルクに集めた移民の列は、ワイマール、リューネブルクを経てリューベックに到着した。西南ドイツの移住者は、ヴォルムスからライン川を下って航行し、その後ヴェストファーレンやハノーファーを陸路で運ばれて

やってきた。リューベックでは、入植者をしばらく宿営させた。商人シュミット(Christoph Heinrich Schmidt)は、ロシア政府から 500 ルーブリの手当を受け、その宿営を組織する仕事をした。入植者のうち財産家は市民の家に宿営させられることもあったが、資力のない者は、リューベックの港の近くにつくられた仮小屋で寝起きした。厳しい監視であった。というのも、すでに支度金を受け取っていた者のなかで密かに逃げ出すということがあったからである。入植者の宿泊所における秩序の監督には、かれらのなかで暮らし向きのよい人間があてられた。そうした管理人は、入植者には馴染みのある役人の名称(Vorsteher 管理人、Schulze 村長あるいは Vogt 監督官)を与えられ、宿泊している入植者にたいして 日当――男性に 8 シリング、女性に 5 シリング、子供に 3 シリング、乳児に 1 シリング――を払い渡し、食料を配布した。ちなみに、こうした管理人の多くは、移民渡航後は入植地の共同管理人となり、ヴォルガ流域のある入植地には、その管理人であるハンブルク出身の黄銅鑄造エクラツケの名前がつけられた。

リューベックで何千人もの入植者が乗船した 1765 年、ペテルブルクからちょうどその古いハンザ都市に到着した 30 歳の歴史家シュレツァー(August Ludwig Schlaezer)がその様子を目撃している。シュレツァーは、牧師の息子として生まれ、ゲッティンゲン大学でオリエント学を学んだ後、1762 年にペテルブルクに行き、そこで科学アカデミーの助手をつとめ、1764 年からはエカチェリーナ 2 世によって科学アカデミーロシア史教授に任命されていた。シュレツァーは、1765 年にロシア政府から託されたいくつかの仕事――学術書購入、精神病院の調査など――を抱えてドイツにやってきたのである。8 月 4 日にリューベックに到着したシュレツァーは、8 月 6 日付の最初の手紙のなかで、次のように記している。「私は、大きな怠慢を犯してきた。というのは、ペテルブルクでは私は入植制度、入植者が送られる地方の状態などについてよく問い合わせることはしなかった。」かれは、8 月 21 日には、5 年前からデンマークの農村に定住していたプファルツ人がその年だけですでに 3000 人以上リュー

ベックを経由してロシアへと輸送された、と報告している。シュレツァーによれば、「人びとは、サラトフについて良いイメージをもっており、それをイタリアのような国とみなし、ただ、タタールにたいして安全が保証されていないのではないかという心配をして」おり、ヴォルガの定住予定地域をレモンの花咲く国のように思い描いていた、という。シュレツァーは、「ロシア愛国者」として自分の興奮を隠すことなく、ロシア政府のドイツ人入植徴募を支持したのである(20)。

(2) リューベックからペテルブルクへ

リューベックからクロンシュタットへの航行には、通常、約 9—11 日を要した。しかし、「向かい風」のときは、船は同じ距離を六週間もかかることがあった。イギリスやハンザの船主が、豊富に手に入れた食料の岸での販売により多くの利益を得るために人為的に航行を長引かせたということも想像される。しかし、沖での嵐が航行を困難にしたということも稀ではなかった。1766 年 5 月 26 日にリューベック港を出発した船「マリア・ソフィア」には、282 人の入植者とともにプロイセンのルター派教徒の将校プラーテン(Bernhard von Platen、ポンメルン出身)が乗っていたが、かれが後に残したの『入植者の旅行記ならびにロシア人の生活ぶり』によると、その船で、ある男は毎日 1 クヴァルトのワイン、3 日毎に 1 クヴァルトのブランデー、6 ポンドの薫製ハム、パンとビスケットの割当を受け取っていたが、貧しい何人もの入植者は、そのような食料をまるまる 1 週間もみつけることはなく、しばしば飲料水にも不足し、必要な塩がなく、パンが黴はじめていた、という。この航行で死者がでることがあった。ゲルンハウゼンのパン屋ヒューン(Johannes Huehn)の記述によると、「渡航の 2 日目に、かれが非常によく知っていたデルクの娘 2 人が船上で突発的な恐ろしい病気で死んだ。その死体は、慣例によりかれの目の前で海に投げ込まれた。」

クロンシュタットに到着した入植者の船は、その向かい側にあるオラニエンバウム(今日のロモノーソフ)に向かった。オラニエンバウムの城は、かつてはピョートルー

世の寵臣アレクサンドル・メンシコフのものであったが、ピョートル 3 世が建設した兵舎があり、それがドイツ人入植者の宿泊所として使われた。しかし、若干の人びとは、青天井の下で、あるいは自分たちで木材と柴の束で建てた小屋で眠らざるを得なかった。入植者の一部は数日後にそこを出発することができたが、かなりの者は何ヵ月もそこに滞留せざるを得なかった。ある移民団は、1766 年の夏中、冬の到来までそこに滞留せざるを得なかった。このオラニエンバウムで入植地が決められたのではあるが、それは、人びとがドイツで聞かされていた通りにはいかなかった。ロシアの官吏イヴァン・クールベルク(Kuhlberg)は、到着する入植者にヴォルガ流域で農民となることを納得させる役割を負った。首都ペテルブルクやその他の重要な駐屯地で勤務——1763 年の布告には俸給の他に 30 ループリの贈与を受け取るということが規定されていた——しようと考えていた貴族・将校の期待も満たされなかった。先のブラーテンは、貴族称号の故に将校として女帝に仕えてもよいという許しを徴募官から得ていたが、結局はヴォルガのある農民村落に入り込まざるを得なかった。かれは、自ら耕作者になること——貴族にとってはなんという恥辱——を拒否したので、村の学校の教師を勤めるより他に残された道はなかった。オラニエンバウムでは、入植者は、ロシアの臣民であることを宣誓させられた。オラニエンバウムの牧師をしていたチューリンゲン出身のケーニヒ(Lohann Christian Koenig)は、城の教会で宣誓文を読み上げ、入植者はそれを繰り返さなければならなかった。「何人かは、なにもいうことなしに、ただ唇を動かしていただけであった」という記録が残されている。その城の庭園では、入植者が新しい衣服を着せられてエカチェリーナ女帝の検問を受けることがあり、それに感激する者もいたが、入植者にとっては、すでにこの時点で、1763 年の布告での約束とは大きくかけ離れている実情に多くの失望を禁じ得なかったのである。しかし、多くの人びとは退路を断ち、もしも後に再び帰郷の気持がおこればそれが許されるという布告の文言を胸に、管理人と官吏の決定に完全に身を任せたのである。

その後、入植者は、一部は水路で、一部は陸路で、ペテルブルクに向かった。多くの入植者は、かれらが逃げ込んだりすることのないよう、何週間も船に拘留された。このペテルブルクにそのまま留まる権利を得た者は、移住者のうちのほんのわずかであり、大抵は商人であった。暮らし向きのよい家族の若干は、首都の郊外の土地——ツァーリの夏の宮殿ペチェルゴフ、ガッチナ、ツァールスコエ・セロー——に定住することが許された。リーフランドのデュナ川沿いには、1766年5月10日の「絶対的な女支配者の突然の思いつき」による二つのドイツ人入植地（ヒルシェンホーフとヘルフライヒトホーフ）がつくられたが、ドイツからの移住者のほとんどが農業入植者として、南へ向かったのである。それは、ドン川沿いのヴォロネジやウクライナのポルタヴァに向かうものもあったが、大量の移住者は、さまざまなルートでヴォルガ地方へと向かったのである。(21)

(3) ヴォルガ中流域サラトフへのその後の旅

ヴォルガへ向かう移民は、ペテルブルクからまず水路でネヴァ川、シュリユツセルブルク運河、ヴォルホフに沿ってノヴゴロドに向かった。そこで病人は下船させられ、冬を過ごさねばならなかった。ノヴゴロドからは陸路と水路にわかれたようである。陸路は、ノヴゴロドからトヴェーリ、モスクワ、リャザン、ペンザを経由し、サラトフの向かい側にあるペトロフスク（ソ連時代のエンゲルス市）へと向かった。その間、「覆いのついた櫓」で旅することもあった。水路で行く者は、トルショクに向かい、その周辺の村々で夜を過ごした後、帆船でヴォルガ川をコストロマに下り、そこで冬を越した。春になって、そこからオカ川とヴォルガ川を航行し、サラトフまで行った。

南へ向かうこの移民の列には将校と衛兵の監視がつき、輸送の秩序が守られた。しかし、移住者にとっては、新たな不愉快な驚きを経験することになった。日当は減額され、いまや成人男性はドイツで徴募後に子供が受け取っていたと同じ額を受け取るようになった。船では輸送指揮官が、クロンシュタットまで運んだ船会社と同じよ

うに、持ち込んだ食料を高値で売るために輸送団を1ヵ所に不必要に長く引き留めることがあった。移住者のなかには苛立ちがたかまり、船内で暴動がおこることがあった。移住者の1人ツューゲ(Christian Gottlob Zuege)は、ヴォルガ川を下る小舟の一つでおこった暴動――地上で食料を購入しようとした入植者を下船させようとしなかった、日当で豊かな少尉にたいする暴動――の様子について記している。移住者の多くは、たしかに羊の毛皮を持参していたが、寒さと飢えと伝染病による犠牲も多かった。河川航行中に死亡したものは川岸に埋葬された。

輸送される移住者は、目的地に到着するまで、さまざまな経験をする事となった。かれらにはさまざまな宗派の聖職者があらわれ、結婚する2人がいればその式を執りおこない、新生児の洗礼を施した。ボヘミアのメルニツァ出身のカトリック神父コルニスヌスは、1767年、カシーモフからサラトフまでのヴォルガ航行に同行した。移住者は、行く先々でロシアの民衆の生活に驚いた。人間と家畜が農家で一つ屋根の下で寝起きしていることを知り、ロシア人がいかに寒さから身を守るかについて学んだ。農民のところではほんのわずかの肉しか食卓にはなく、かれらはロシア風野菜スープと黍粥で持ちこたえねばならず、また村では自家製のクヴァスが喉の渴きを癒すものであった、ということを知った。ある村では、取るに足りない原因で農民と入植者のあいだで衝突がおこり、死者の犠牲をだすという出来事があった。ペテルブルクからサラトフに送られたドイツ人入植者2万6509人のうち死亡や逃亡で姿を消したのが3293人いたという数字がある(22)。

ともあれ、こうして、移民団が続々とヴォルガ流域のサラトフ周辺に到着した。サラトフには、ドイツ人がうようよしはじめ、都市の人口は約1万人になった。入植者たちはここの市長官の管轄下におかれ、1768年からは、ここに設置されたペテルブルク外国人保護局支所の管轄となった。サラトフに到着した入植者には、すべての区別なく150ルーブリが支払われ、これでかれらは、入植地に家を建て、穀種、家畜および家財道具を手に入れるはずであった。しかし、若干の人びとにあってはこの金は

すぐに使われてしまい、何人かの人びとはそれを盗まれてしまった。ツューゲが生活するはずであった入植地(Potschinnoja)——後にクラツケ入植地と名付けられる——はカルムイシ川がメドメディザに注ぐ河口に位置していたが、ドイツでピアノ製造業者であったマース(Maas)——民族楽器以外のものは知らないサラトフのロシア人のなかではその後数年のうちにかれの製造するピアノの買い手はいなくなってしまう——と一緒にそこへ向かった。かれらは、その途次、きわめて貧窮に苦しんでいたドイツ人入植者と出会ったが、移送責任者は、かれらが接触するのを避けようとした。ツューゲたちは、馬車でさらに山沿いに向かった。そして、その後の出来事について、かれは次のように記している。「われわれの移送責任者が止まれと叫んだ。われわれはそれを非常に怪訝に思った。というのも、夜営までにはまだあまりに早かったからである。しかし、そこがわれわれの旅の目的地であるといわれたとき、われわれの怪訝はやがて驚愕と恐怖に変わった。小さな森の他には、ほとんど3シュー(約90センチメートル)以上の高さはなく、大部分枯れた草が見渡すかぎり広がっている荒地に佇んでいることに驚いて、われわれはおたがいの顔を見合わせた。」(23)

ドイツ人がヴォルガ流域に到着したとき、そこはかれらにとって、約束されたパラダイスではなく、荒野であった。かれらは、自分たちに約束されていたものは何も現地に見出すことはなかった。快適な生活の代わりに、生き延びるための苛酷な闘いが待っていた。かれらは、ヴォルガ・ステップの暑く乾いた夏と寒い冬という厳しい自然と格闘しなければならなかっただけでなく、隣人たちやカルムイク人・キルギス人・バシキール人の血なまぐさい争いのなかで自分の身を守らなければならなかった。これに加えて、ロシア全土で悪評高い盗賊団が古来ヴォルガ地域で乱暴を働いていた。

誰もが辛苦を強いられ、若干のものは入植生活を放棄し、他のものは死んでいった。しかし、それでも多数のものは、生き抜いた。かれらは、1世帯あたり30デシャチナの土地を割り当てられ、その土地をまもなく、ロシア到着時にかれらの使える唯

一の農具であった木製無輪鋤(ソハー)(Hakenpflug)からドイツで使い慣れた鉄製有輪鋤 Scharpflug に代えて耕作しはじめた。収穫時にはかれらは、刈り鎌(Sichel)の代わりに大鎌(Sense)を使用した。ドイツ人入植者は、ロシア人農奴と比較してかなりの特権を享受しており、徐々に相当の富を築いていった(24)。

注

- (1) 邦語文献に栗生沢猛夫「モスクワの外国人村」(小樽商科大学『人文研究』69, 1985 年)がある。
- (2) Roger Bartlett, Human Capital. The Settlement of foreigners in Russia 1762-1804, Cambridge, 1979, p. 15; Michael Schippan/Sonja Striegnitz, Wolgadeutsche: Geschichte und Gegenwart, Berlin, 1992, S. 8-10; Richard H. H. Walth, Strandgut der Weltgeschichte. Die Russlanddeutschen zwischen Stalin und Hitler, Tuebingen, 1994, S. 27-28.
- (3) Roger Bartlett, op. cit., pp. 5, 17. Michael Schippan/Sonja Striegnitz, op. cit., S. 10-12.
- (4) A. Klaus, Nashi kolonii, opyty i materially po istorii i statistik inostranoi kolonizatsii v Rossii, vypusk 1, SPb., 1869. Reprint with Introduction by R. B. Bartlett, Oriental Research-Partners, Cambridge, 1972, str. 5-6.; Roger Bartlett, op. cit., pp. 18-20; Michael Schippan/Sonja Striegnitz, op. cit., S. 13. Detlef Brandes, Von den Zaren adoptiert. Die Deutschen Kolonisten und die Balkansiedler in Neurussland und Bessarabien 1751-1914, Muenchen, S. 11-18.
- (5) Roger Bartlett, op. cit., p. 21. Detlef Brandes, Die Ansiedlung von Auslaendern im Zarenreich unter Katharina II., Paul I. und Alexander I., Jahrbuecher fuer die Geschichte Osteuropas, 34, 1986, S. 163.
- (6) Michael Schippan/Sonja Striegnitz, op. cit., S. 14-16.
- (7) Roger Bartlett, op. cit., p. 22. Michael Schippan/Sonja Striegnitz, op. cit., S. 16.
- (8) Roger Bartlett, op. cit., p. 23. Michael Schippan/Sonja Striegnitz, op. cit., S. 16-17.
- (9) Roger Bartlett, op. cit., p. 25-29. Michael Schippan/Sonja Striegnitz, op. cit., S. 17-18, 33.

- (10) Roger Bartlett,op.cit.,p.31.Detlef Brandes,Die Ansiedlung von Auslaendern im Zarenreich unter Katharina II.,Paul I. und Alexander I.,S.161.Michael Schippan/Sonja Striegnitz,op.cit.,S.19–20.Detlef Brandes,Von den Zaren adoptiert,S.19.
- (11) ドイツ語版の全文が次に掲載されている。Michael Schippan/Sonja Striegnitz,op.cit.,S.215.
- (12) Ibid.
- (13) Ibid.,S.19–20; Roger Bartlett,op.cit.,pp.35–39;Lothar Dralle, „Die Deutschen in Osteuropa.Ein Jahrtausend europaeische Geschichte, Darmstadt,1991,S.135.
- (14) ロシア語版全文は次に掲載されている。A.Klaus,op.cit.,str.7–9.ドイツ語版全文は次に掲載されている。Michael Schippan/Sonja Striegnitz,op.cit.,S.216–220.Richard H.Walth,op.cit.,S.454–458.英語版全文は次に掲載されている。Roger Bartlett,op.cit.,pp.237–242
- (15) 注 14、および Roger Bartlett,op.cit.,pp.47–49.Lothar Dralle,op.cit.,S.135–138.Michael Schippan/Sonja Striegnitz,op.cit.,S.21–22.Richard H.Walth,op.cit.,S.28–29.
- (16) Roger Bartlett,op.cit.,pp.241–242.に掲載されているのが、この入植候補地であったと思われる。
- (17) Michael Schippan/Sonja Striegnitz,op.cit.,S.19–20.
- (18) Roger Bartlett,op.cit.,pp.49,59.
- (19) Ibid.,S.29.
- (20) Ibid.,S.48–51.
- (21) Ibid.,S.51–55.
- (22) Detlef Brandes,Die Ansiedlung von Ausl ndern im Zarenreich unter Katharina II.,Paul I. und Alexander I.,S.172.
- (23) Michael Schippan/Sonja Striegnitz,op.cit.,S.55–57.
- (24) Lothar Dralle,op.cit.,S.140.

第2章 ヴォルガ中流域のドイツ人入植地ガルカ(ウスチークラリンカ)村

1 自然環境

ヴォルガ中流域のドイツ人村ガルカ(巻末の地図 2 の 36)——入植当初は最初の共同体長の名前をとってマイアーヘーファー村と称していたが 1768 年にガルカ村と改称、ロシア名はウスチークラリンカ村——は、サラトフ県カムィシン郡ウスチークラリンカ郷に属していた。サラトフ市から南に 150 ヴェルスタ、ヴォルガ川右岸の山地側に、東経 15 度 29 分、北緯 50 度 29 分のところに位置していた。まず、20 世紀初頭のマックス・プラエトリウスによる観察によって、村の自然環境をみておこう。

ヴォルガ川沿いに南西から北東へと丘陵地がひろがっていたが、ガルカ村の土地自体も、ゆるやかに傾斜していた。村の北東 7 ヴェルスタに郷村のホルスタイン村があったが、その北東の端には幅広い、しかし樹木がほとんどない山峡があり、かつてはそこを小さなガルカ(クラリンカ)川が流れていて、村の名称はこれに由来する。水源からは粘土製の水溝によって水車に給水されていたが、これも 1905 年には停まったままに放置された。当時、山峡には水流はなく、春に雪解け水が流れるだけであったという。北東部には約 1 ヴェルスタのところにも小さな峡谷があったが、また、南西に約 3 ヴェルスタ、郡市カムィシン——村から 40 ヴェルスタ——に向かう途上にも、こちらは少し大きな峡谷があった。この二つの峡谷はいずれもヴォルガ川に向かっており。まばらな叢林がみられ、成長の止まったオークの木が生えていた。ヴォルガ川には村の島が二つあった。一つは、川が屈曲したところにある、長さ 5 ヴェルスタ、幅 3 ヴェルスタの大きさの、森林に覆われたガルカ島、もう一つは、その南、村の向かい側にある小さなオスリョヌイ島であった。後者は、春には完全に水のなかに没してその上を汽船が航行していたという。

2 村の創設

20 世紀初頭の村の自然環境は以上のものであったが、この地にドイツ人の入植村が創設されたのは、エカチェリーナ 2 世による外国人入植政策(1762 年)が実施されてすぐのことで、いわば第一陣(1763 年以降)の入植者による。郡役場の記録によればガルカ村の創設は 1768 年ということであるが、隣接するサマーラ県のドイツ人入植地ヴォルスカヤの司祭館の資料によれば 1764 年にはすでに村は建設されていたとあり、クラウスは、1764-66 年を村創設期としている。ガルカ村の属するウスチークラリカ教区の教会記録簿からは村の歴史についての豊かな情報が得られるが、1853 年に司祭イ・ヒンシュは、その教会記録簿に、村の古老の証言から、村創設期の状況について記している。それによれば、「1763 年 7 月 22 日のエカチェリーナの布告により、ドイツのほとんどすべての地域からサラトフ県にやってきた。そこに新しい故郷をつくるために。ヴォルガ川の山地側の南部を将来の居住地として選んだ入植者は九つの入植地[後のウスチークラリカ郡]に定住した」。ウスチークラリカに司祭館が建てられたが、その教区の管轄は、当初は九つの入植地であった。後にのうちの四つの入植地が離れてヴォドノイ・ブイエラケル教区を形成し、ウスチークラリカ教区を構成することとなった入植地は、ウスチークラリカの他には、ニジュナヤ・ド布林カ、ヴェルチナヤ・ド布林カ、ブイダコフ・ブイエラク、ヴェルチナヤ・クラリカであった。この五つの入植地に定住したドイツ人は、ヴェルテンベルク、プロイセン、バーデン、プファルツ、ザクセン、ヘッセン、ダルムシュタット、ホルシュタイン、デンマークから、そして若干はスウェーデン、イングランド、ポーランドから来住し、ほとんどがルター派であった。総勢 417 家族で男女 1 千人ほどであったが、入植地ごとに家族数をみると、つぎのようであった。

ウスチークラリカ	81 家族	うち 15 家族は後に外へ移住したか消滅
----------	-------	----------------------

ニジュナヤ・ド布林カ	118	22
------------	-----	----

ヴェルチナヤ・ド布林カ	71	5
ブイダコフ・ブイェラク	71	13
ヴェルチナヤ・クラリンカ	76	12

ヒルシュによる創設期の情報は以上であるが、入植地ヴォルスカヤの司祭館の記録からは、1768 年のウスチークラリンカについての情報が得られる。それによれば、当時の人口は 195 人（男 106 人、女 89 人）、家族数は 64、家長の年齢は 23—50 歳であり、ヘッセン出身者がもっとも多かったが、他には、ヴェルテンベルク、ブファルツおよびバーデンから来住しており、また、故郷での職業をみると、農民であったのがほとんどで、6 人が軍人、1 人は土地測量技師、1 人は手工業者であった。耕地面積は 320 デシャチナ、播種量（ライ麦のみ）は 40 チェトヴェルチ 4 チェトヴェルクであった。

3 村の人口

ガルカ村の人口については、すでに言及したウスチークラリンカ教区の教会記録簿、ヴォルスカヤ司祭館の記録、第 5 回（1788 年）から第 10 回（1857 年）の全国人口調査に情報があるが、それらをまとめて一覧にしたのが表 2-1 である。

表 2-1

年	家族数	男性数	女性数	総人口
1764	81	—	—	194
1768	64	106	89	195
1788(5 回人口調査)	49	146	139	285
1798(6 回人口調査)	65	191	189	380
1816(7 回人口調査)	94	332	337	669
1834(8 回人口調査)	178	640	658	1298
1836	164	—	—	—
1849	—	916	898	1814

1850(9 回人口調査)	218	970 980	875 884	1845 1864
1851	—	955	899	1894
1852	—	1018	921	1939
1853	162 —	— 1018	— 913	1856 1931
1854	—	1037	928	1975
1855	—	950	899	1849
1856	—	976	912	1888
1857(10 回人口調査)	— 176	981 1037	933 967	1914 2004
1858	—	1062	988	2050
1859	—	1052	989	2041
1860	—	638	597	1235
1861	—	654	614	1268
1862	—	695	667	1362
1863	—	—	—	—
1864	—	753	734	1487
1865	—	792	773	1565
1866	—	817	784	1601
1867	—	847	810	1657
1868	—	892	847	1739
1869	—	984	889	1873
1870	—	1009	905	1914
1871	—	1040	910	1950
1872	—	1067	937	2004
1873	—	973	980	1953
1874-87	—	—	—	—
1888	—	—	—	2709
1889	—	—	—	2725
1890	—	—	—	2725
1891	—	—	—	2626
1892	—	—	—	—
1893	—	—	—	2717
1894	—	—	—	2744
1895	—	—	—	2744
1896	—	—	—	—
1897	—	—	—	2828
1898	—	—	—	2815
1899	—	—	—	2907
1900	—	—	—	2955

1901	—	—	—	2955
1902	—	—	—	3059
1903	—	1583	1567	3150
1904	—	—	—	3033
1905	—	1647	1613	3260
1906	—	1671	1642	3313
1907	—	1702	1660	3362
1908	—	1730	1677	3407
1909	—	—	—	3379
1910	—	—	—	3426

注:1764 年、1836 年、1849-73 年はウスチークラリンカの教会記録簿の数字、

1903 年、1905-1908 年はウスチークラリンカ教区の司祭の数字、1888-91 年、

1893-95 年、1897-1902 年、1904 年、1909 年、1910 年は Friedensboten-

Kalender(hrsg. von P.H.Guenter)の数字による。

この表の数字によれば、入植当初と 1910 年とを比較すると、約 17 倍の人口増加である。プラエトリウスによれば、ヴォルガ地方から多くのドイツ人家族がカフカース、シベリアなかんずくアメリカへと移住したことを考えると、この人口増加の数字は印象的である。ウスチークラリンカ教区の教会記録簿には、この地域からの移出についてつぎのような記録があるという。1850 年に不作からカフカースへの移出の動きがあったが、移住者の多くは途中で引き返してきた。1875 年には、導入された兵役義務を移出によって免れようとした入植者が多数いた。1886 年にも、「兵役への恐れから、アメリカへの多数の移出が生じて」いた。1877 年には、「多数の家族がアメリカへと移住した」。大ロシア全体が大不凶に見舞われた 1891 年には、「まったくの不凶の年！ 多くの者がアメリカへ移住した」。このように当地域から外への移住の動きがあったが、ガルカ村の人口には、表にみるように、それに相応した変化はみられない。20 世紀初頭にプラエトリウスがガルカ村の入植地役場で聞き出した情報では、この村では、1899 年と 1900 年にアメリカへの大量移住がおこり、この動きは 1906 年のストルィピン改革以降に新たにみられ、200 人(男性)の移住者を数え、1910 年の夏

にはさらに 16—17 家族が移住したというが、表からは、アメリカ移住による人口減少ということは読み取ることはできない。

表の数字から顕著に窺えるのは、1859 年から 1860 年にかけての大幅な人口減少である。この減少については、ウスチークラリカ教区の教会記録簿の 1860 年の項につぎのような記述がある。「この年[1860 年]、この教区から 386 家族がヴォルガ川の草地側のイエルスラン川(いわゆる塩地域ザルツトラクト)沿い移住したが、そのうち 101 家族はウスチークラリカからで、男性 419 人、女性 414 人、合計 833 人である。」1840 年 3 月 20 日に帝の裁可を得た大臣会議の決議によって、サラトフ県のドイツ人入植地では第 8 回人口調査(1840 年)の登録農当り 15 デシャチナの土地が追加的に付与されることになったが、ガルカ村の入植者たちはそれをヴォルガ川の対岸の上記の地域に受け取ったのである、1860 年の人口減少はこれが原因である。

ガルカ村の人口に関連しては、1849—73 年の期間についての男女比率と出生・死亡状況の資料があるので紹介しておこう。

表 2-2 は、女性 100 人にたいする男性人数を 5 年毎の平均で示している。この表から、ガルカ村では男女の比率が比較的均衡していたといえようが、1869—73 年については、教会記録簿に、この時期の何回かの豊作によりより多くの働き手が必要となっていた、という言及がある。

表 2-3、表 2-4、表 2-5

は、出生と死亡にかんする数字である。とくに注目すべきは、表 4 にみるように、1849—53 年と 1859—63 年における高い死亡率であるが、前者については、教会記録簿に、1850 年の全般的不作と 1853 年の「炎症熱」という原因が指摘されている。

加えて、20 世紀初頭の職業構成を知る資料として、当時の手工業者の比率にかんする表 2-6 がある。手工業者以外が農業従事者であることはいうまでもない。

また、20 世紀初頭のガルカ村では、ほとんどがドイツ人であった住民のなかに、ロシア人の鞣皮工が 1 人いた他、毎年 8 月には 10—11 人のロシア人がシムビルスク

県から来村し、フェルト製造の手工業に従事し、翌年1月に帰って行った。当時の住民の信仰は、入植以来のルター派であったが、バプティスト派が0・9%おり、ロシア正教が1人——おそらくロシア人の鞣皮工であろう——であったと報告されている。言語については、入植者の言語であるドイツ語であったが、それぞれの故郷の方言が混合していたといい、なかではヘッセンの方言が優勢であったという。フランス語が会話のなかに使われることはあったが、ロシア語は、ヴォルガ地方のドイツ人入植地のなかにはその使用が顕著であったところもあったようであるが、ガルカ村では母語が比較的純粋に保持されていたようである。その理由として、プラエトリウスは、学校でのロシア語の授業がここでは重視されていなかったこと、ドイツ人入植地の住民は文化的に低くみられるロシア人農民にたいしてかなり拒否的であったこと、を挙げている。

表 2-2

女性 100 人に対する男性比率

1849-53	109.0
1854-58	107.4
1859-63	106.0
1864-68	103.9
1869-73	109.8

表 2-3 年平均の出生人数

年	男児	女児	女児 100 人 に対する男 児
1849-53	48.2	41.6	113.5
1854-58	50.6	51.8	97.7
1859-63	58.5	55.0	106.4
1864-68	56.8	53.4	106.3
1869-73	58.2	55.4	105.0

表 2-4 年平均の死亡人数

年平均	死 亡			1000 人の人口にたいする死亡者数		
	男性	女性	男女	男性	女性	男女
1849-53	33.8	35.4	69.2	17.9	18.7	36.6
1854-58	28.8	26.6	55.4	14.9	13.7	28.6
1859-63	38.25	29.0	67.25	25.9	19.7	45.6
1864-68	24.2	23.4	47.6	15.0	14.5	29.5
1869-73	28.2	26.2	54.4	14.5	13.5	28.0

表 2-5 出生・死亡

	1849-53	1854-58	1859-63	1864-68	1869-73
出生数	448	512	459(1)	550	568
死亡数	346	277	269(1)	238	272
出生数-死亡数	+102	+235	+190	+322	+296
人口増加	+117	+119	-593(2)	+252	+224

注(1)1861 年の数字は不明。

(2)1863 年の人口の数字が不明により、1864 年の数字で計算してある。

表 2-6 手工業者数

年	人口	手工業従事者(%)	手工業専従者(%)
1906	3313	35(1.05)	—
1908	3407	53 (1.55)	39 (1.14)
1909	3379	51 (1.5)	37 (1.09)

出典:ガルカ村の入植地役場からの情報。

4 農業

ガルカ村の土壌は、農業にとくに好都合であったというわけではない。黒土は共同体の土地の 4 分の 1 であり、それは 6 ヴェルショークから 1 アルシンの深さであった。2 分の 1 は砂質であり、残りの 4 分の 1 は粘土質で、硝石・石が混入していた。土地の下層はほとんどが赤粘土であった。ヴォルガ川から内陸に入れば入るほど地質は良くなっており、場所によっては黒土が 2 アルシンの深さにまで及んでいた。

村の土地面積については、1834 年に耕地が約 2185 デシャチナ、1886 年のゼムストヴォ調査によれば耕地が 3127・7 デシャチナ、草刈地が約 250 デシャチナ、放牧地が 1737・7 デシャチナという数字が残されているが、20 世紀初頭には、土地総面積は 1 万 1096・8 デシャチナ、そのうち適地が 5923・8 デシャチナ、「不良」地が 5173 デシャチナであった。適地のうちどれだけが耕地であったかの資料はないが、プラエトリウスの計算によれば、75 年間に約 942 デシャチナの耕地の増大がみられるという。

耕地は、20 世紀初頭には、7 耕圃からなっており、それぞれの耕圃はいくつかの耕区に、そして、さらに地条に分けられていた。かつては 3 年毎に土地割替が行なわれていたようで、最後の割替は 1898 年であった。割替は、籤引きによって行なわれた。

村の北にある第 1 耕圃は、「シュヴァーバー・ザイト」と呼ばれ、地質から 3 つの耕区に分けられていた。さらにその北には「古い畑(アルトフェルド)」と呼ばれる第 2 耕圃があり、11 の耕区に区切られていたが、ここは最良の土地で、入植当初から有輪鋤(プフルーク)で耕され、いつの数字か不明であるが、1 デシャチナ当り小麦 150 ブードを収穫したことがあったという。この西に 3 つの耕区からなる第 3 耕圃「三角帽」(3 耕区)、さらに南に第 4 耕圃「三角帽への道の上の休閑地」(4 耕区)、第 5 耕圃「三角帽への道の下休閑地」(3 耕区)、その右側に第 6 耕圃「不毛地」、第 7 耕圃「ドルガルカの上に」(6 耕区)が位置していた。ちなみに、農民にとってもっとも遠い畑は、村の集落から 9 ヴェルスタの距離にあったという。

地条の規模についてみれば、たとえば第 1 耕圃では、幅 2 ファーデンで長さ 80 ファーデンの地条がみられ、最大規模は、幅 50 ファーデン、長さ 100 ファーデンであった。

この村では現存の男性(ドウシャー)が土地配分の単位とされていたが、各単位には、7 つの耕圃の各耕区に 1 つずつの地条が割当てられた。各単位の農民は 30 も

の地条を散在して保有していたことになる。1898 年の総割替の際には、当時在村していた男性数 1560 人に土地が配分されたが、1 ドウシャー当りの土地面積は約 7・1 デシヤチナであり、そのうち「適地」が 3・8 デシヤチナ、「質の悪い」土地が 3・8 デシヤチナであった。しかし、その後の男性農民の死去や家族分割によって、加えて、アメリカ移住希望者による移住資金獲得のための分与地売却によって、1910 年には、各ドウシャーが利用している土地面積は不均等になっていた。ちなみに、アメリカ移住希望者のなかには、出発後何週間もしないうちに戻ってきて、分与地売却の取引を解消しようとしたが無駄であったという。

耕作・栽培は、長い間、慣習にしたがい、何のシステムもなしに行なわれていたというが、その実態は詳らかではない。ただし、20 世紀に入るところからの基本的システムとしては、第 5、第 6、第 7 耕圃が休閑→ライ麦播種→小麦播種の順番で利用され、他の 4 耕圃では西瓜と小麦の輪作が、すなわち、第 1 年目には第 1 耕圃と第 2 耕圃の半分とで西瓜、第 2 耕圃の半分と第 3、第 4 耕圃とで小麦が、第 2 年目には第 2 耕圃の半分と第 3 耕圃とで西瓜、第 1 耕圃、第 2 耕圃の半分、第 3 耕圃で小麦が、第 3 年目には第 4 耕圃で西瓜、第 1、第 2、第 3 耕圃で小麦が栽培されていた。こうして、ガルカ村の主要作物は小麦であったが、ミンフによれば、どこの畑で栽培されていたか不明であるが、小麦、ライ麦、西瓜以外の作物も栽培されており、1890 年代には小麦、ライ麦、カラス麦の比率が 15・3・1 であったという。さらに、わずかなではあるが黍、メロン、向日葵、南瓜が、家畜飼料としてトウモロコシが、そして自給用に良質のジャガイモが、栽培されていた。ジャガイモは、ヴォルガ川・ガルカ川の川岸の沖積地——春には雪解け水で浸水する——を利用し、32・5 デシヤチナの広さで栽培されていた。

表 2-7 は、1908 年と 1909 年における播種量と収穫量を入植地役場の資料によって示している。

1909 年はロシアが全国的に豊作であったというが、この年には、ガルカ村では、穀物の明細は不明であるものの、平均してデシャチナ当り 45—50 プードの収穫があった。しかし、通常は、プラエトリウスによれば、デシャチナ当り 18—20 プードの平均収穫量であり、より内陸の良質の第2耕圃では時折デシャチナ当り 70—80 プードであったという。

表 2-7 播種量と収穫量(1908、1909 年)

	播 種 量	(プード)	収穫量	(プード)
	1908 年	1909 年	1908 年	1909 年
小麦	9360	9360	28080	93600
ライ麦	2204	2204	6612	17632
カラス麦	200	200	520	1600
黍	52	52	52	520
ジャガイモ	2400	2400	7200	9600

ウスチークラリンカ教区の教会記録簿によれば、19世紀中葉から 20 世紀初頭にかけての 60 年間に、凶作は 13 回(1850、52、53、55、64、73、75、79—81、85、91、98 年)記録されているのにたいして、豊作とされる年は 9 回(1851、54、67、68、70、71、74、77、96)であり、その他の年は「中程度」と記されている。

凶作をひきおこす原因としては、まず、夏期に持続的に生じていた暑熱・旱魃による水不足である。ガルカ村には雨は非常に稀で、プラエトリウスによれば、もしも降雨があるとすればそれは霰と一緒にあり、その効用より害の方が大きかったという。水不足にたいしては、春の雪解け水の一部を畑に引き入れるという対処が行なわれていた。

水不足の他に、農作物の収穫に大きな被害を与える要因として、この村では「煙霧」、山鼠、移住バツタがあった。

「煙霧」といわれるのは、実は、大抵は5月から7月にかけて東から風に乗ってやってくる「一種の非常に細かい埃」であり、早朝には灰色の霧のように見え、そのなかを昇る太陽は「血のように赤い球」であったという。この時期に穀物の茎はすでに成長して抵抗力をつけていたが、開花期にある果樹は、この「煙霧」により大きな被害を蒙っていた。「煙霧」から作物を保護するような対策はなかった。

繁殖率が高く、穀物の茎を噛みとるという山鼠の大群による作物被害は長年の災厄の一つであった。山鼠は臭猫やイタチなどの小獣が天敵であったが、そうした小獣が十分にいたわけではなく、夏期だけで約5平方ファースンの広さの茎が山鼠の被害にあったという。この災害にたいしては、ヴォルガ地方の他の村におけると同様な、いくつかの対策が講じられていた。畑の周囲に深い溝を掘って山鼠の侵入を阻止しようとしたが、山鼠は溝に落ちて下で穴道を作ったり、落ちた山鼠の上を後続の山鼠がきて溝を渡ったりして、あまり効果がなかった。そこで、ガルカ村は、1891年に共同体の集会において、各「ドウシャー」にたいして年10匹の鼠の尻尾を、したがって村全体では1万5000の尻尾を入植地役場に持参するよう義務付け、この義務の不履行にたいしては不足の尻尾一つにつき3カペイカの罰金を賦課することを決議した。3月末から5月中旬にかけての雪解け期が格好の捕獲時期であり、この時期に駆り出される少年少女は鼠を棒で退治し、山鼠の根絶に大きな成果を上げた。

移住バッタの被害については、ウスチークラリンカの教会記録簿のなかに、1857年の出来事として、次のような内容の記録がある。「無数のバッタが7月28日に草地側から、雲のように、大きな音をたてて襲ってきて、それは8月15日まで続いた。バッタの群れは4分の1アルシンもの厚さで畑を覆い、穀物を切りとり、牧草地、西瓜畑、果樹園を荒らした。バッタは4インチの大きさであった。」ただし、教会記録簿では、この年は凶作年には数えられておらず、また、移住バッタの被害については、その後はとくに記録されることはなかった。

ともあれ、この村では、何年にも凶作があったのだが、しかし、そのときにでも、それが飢饉にまでいたることはなかったという。これには、販売用の干し草と木材を供給するガルカ島の存在が大きかった。

5 役畜・牧畜

ガルカ村の家畜数については、1886 年、1906 年、1908 年、1909 年の数字が明らかである(表 2-8 を参照)。

表 2-8 ガルカ村の家畜数

	1866 年	1906 年	1908 年	1909 年
馬	826	508	516	528
雄牛	643	1583	1334	1345
雌牛	1260			
子牛		317	298	248
羊	1683	1045	1013	1126
豚	790	560	380	430
山羊	128	253	224	246

この表から、20 世紀初頭には、1866 年に比べると、山羊を除いて、家畜の顕著な減少を読み取ることができる。ただし、20 世紀初頭の 3 年の数字については、家畜保有税(Steppgeld)納入をできるだけ避けようとして人々が保有頭数を少なめに報告していた、という事情が考慮されなければならない。馬と牛は、共同放牧地に放すか放さないかは関係なく、子牛、子馬、盲目の馬は除いて、1 頭につき年間 30 カペイカの家畜保有税が課せられ、春から秋まで共同体の小舎にすべてが入れられ、牧人が昼間に放牧していた羊は、1 頭当り年間 12 カペイカの税額であった。羊小舎に羊を入れている農民は、相当量の藁および羊小舎周囲の柵——柳の編み細工——の一部を提供しなければならない。

プラエトリウスの観察によれば、馬と雄牛は、主として農作業の役畜として使用されていた。いずれも中位の大きさの品種であったが、飼料が不十分で持久力がそれ

ほどあるわけではなく、加えて、ガルカ村の土地は非常に重く、掘り起こすのにより多くの頭数を必要とした。たとえば、サラトフ市周辺では畑仕事に2—3頭の馬で済むところをガルカ村では4対の雄牛を必要とし、当地は「雄牛の土地」と呼ばれていたという。

雌牛は、小さくて褐色の品種であり、毎日2回搾乳されたが、単に4—6リットルぐらいの量に過ぎなかった。ただし、大量のバターがカムィシュ市やツァリーツィン市に売りに出されていた。種雄牛がガルカ村の上村と下村にそれぞれ4頭ずつ共同体の費用で調達され、冬の世話は1人の村人に依頼するが、越冬の費用は雌牛1頭当り50カペイカで、雌牛保有者が負担した。

羊は、5月と8月初めに刈り込みが行なわれた。羊毛は、一部はフェルト製長靴とフェルト製敷物に加工され、一部は農家内で紡がれた。ただし、衣服は安価な製品を村内や都市の店で購入することが多くなり、以前に比べれば稀にしか毛糸の自家製衣服を着ることはなくなっており、羊の保有頭数の減少もこの事情によるところが大きい。羊の肉は、夏に村人の主要な食料となった。

豚の肉は、冬に主要な食料となった。しかし、20世紀初頭の10年間は咽喉炎や原因不明の病気——一種の胃カタル——により死亡する豚が多く、肉の消費を制限せざるを得なかっただけでなく、年に平均して2000ルーブリの損害があったという。豚の毛は村を通過する人々に大量に売られていた。

以上のような家畜の他に、品種は良くなかったが、鶏、鷺鳥、鴨などが飼育されており、卵は村にやってくる買占め人に売られ、羽毛は各農家で使われる枕の材料になった。

6 葡萄栽培

入植地創設直後の 1773 年 8 月、ガルカ村を含む一帯を旅行したパラスは、この「ホルシュタイン入植地」において葡萄栽培が行なわれていることに言及している。ライン地方メンジゲン出身の葡萄園主ヨハン・フィリップ・パイラーという入植者は、前年の 1772 年には、2 つの畑の 3000 本の葡萄の木から 20 プードの葡萄房を産し、フランスの軽やかな葡萄酒に似た、アストラハンの葡萄酒よりはるかに良質の、淡紅色の葡萄酒を醸造していた。無塩の乾燥した土壌が葡萄栽培に適していたということであり、水はまったく与えられなかったという。ちなみに、1773 年は、聖霊降臨祭のときの冷気が災いし、葡萄の収穫の減少が予測されていた。

しかし、葡萄栽培がその後どうなったかについては、まったく不明である。おそらく普及しなかったと考えられるが、20 世紀初頭のプラエトリウスの観察によれば、当時、わずかな人によって葡萄栽培が試みられていた。村の北西部の丘陵の傾斜地は、ほとんど砂と粘土からなっており、固い岩石が混入する土地であったが、緯度が北フランスと同じであり、夏の気温が高いということから、1892 年に教区司祭エリ・ベーニングはこの傾斜地における葡萄栽培を勧奨し始めた。1900 年にここに小さな葡萄畑をつくった入植者ブルナーは、实际的経験の不足から大きな収穫をあげることなく、人々の嘲笑の対象となったが、若い教師アレクサンデル・シックは、書物で必要な知識を仕入れ、さらに自らサレプタ、北カフカース、南ロシアにおける葡萄栽培を見聞し、1904 年に賃借した一片の土地から始まった彼の入念な葡萄栽培は、その後に畑を拡大し、1908 年に 250 万 1280 プード、1909 年に 450 プードもの葡萄房を収穫し、1910 年には 1000 プードほどの収穫が見込まれていたという。このシックの指導の下に、何人かが葡萄栽培に乗り出したが、プラエトリウスによれば、1911 年に予定されている土地整理——ストルイピン改革による共同体的土地所有から個人的土地所有への移行および区画地化——の際に多くの人々が葡萄栽培の可能な傾斜地

に土地割当を希望しており、葡萄栽培にこそガルカ村の将来が期待されていたと同時に、個人的所有導入の正当化がこれによってなされる、と考えられた。ただ、その後の葡萄栽培の状況を知る資料は、いまの筆者の手元にはない。

7 手工業

ガルカ村では、入植地役場が郷役場に提出した 1909 年の報告書によれば、当時、肉屋 2 人、仕立屋 6 人、製靴工 6 人、大工 8 人、指物師 7 人、鍛冶屋 3 人、フェルト晒し工 3 人、製革工 2 人の存在が確認されており、その他に、織工が 5 人いたという。

2 人の肉屋は、店を構えるというのではなく、農業の片手間に、それぞれ息子 1 人と一緒に、注文を受けた農家に出かけてその雄牛・乳牛を屠殺して報酬を得る、という仕事をしていた。彼らが自ら購入した家畜を屠殺して肉を村人に売る、ということもやっていたが、その規模は小さかった。仕立屋の 6 人も、注文のある農家に出向いて、渡される原材料で仕事をし、食事を提供され日当を得る、という形態をとっていたが、彼らはすべて農業には従事しておらず、そのうちの 2 人はガルカ村以外の入植者であった。製靴工、大工、指物師も、得意先の家に出向いて仕事をしていたが、製靴工 6 人のうち 4 人、大工と指物師合わせて 15 人のうちの 10 人は、農業を主たる仕事としていた。鍛冶屋 3 人のうちの 1 人は農業を副業としていたが、3 人とも家族とともに、とくに鉄製鋤の普及以来、忙しく働いていた。一年の畑仕事が始まる前には、修理を必要とする鋤が多数、彼らのところへ持ち込まれていた。製革工 2 人は、農業を主としながら、家内で動物の皮をなめし、革紐と馬具を製造していた。フェルト晒し工 3 人は共同で 8 人の働き手を雇っていたが、この 11 人は、シムビルスク県からやってくる出稼ぎのロシア人で、8 月から翌年の 1 月までこの村で 1 軒の家を賃借し、羊毛からフェルト長靴を製造していた。5 人の織工は、農業に従事しな

がら、冬期に家内で紡いだ毛糸で婦人スカートを織っていたが、村人が町や村の店で製品を買うようになっており、その存在理由を失いつつあった。

手工業は、以上から明らかのように、何人かはそれに専従していたものの、多くは農民の副業であった。各農家は、自家消費のためには、なんらかの手工業に従事していた。農機具（木製鋤や干し草運搬車など）・鋸・櫓を製造し、柳枝から垣根を作り、魚笊を編んでいた。10月初めからクリスマスまでは各農家で1、2台の紡ぎ車が動いており、年老いた婦人による羊毛紡ぎが行なわれていたし、主婦はパンを焼いて貯蔵していた。

注 本章は Max Praetorius, GALKA, eine deutsche Aussiedlung an der Wolga, Leipzig, 1912. に依拠している。

第3章 飢饉（1921-22年）とヴォルガ・ドイツ人入植地

「1921年の飢饉」については、これまでも少なからず書かれてきたにもかかわらず、その規模、深さ、そして恐ろしい結果について、十分には解明されていない。とくに、飢饉は1921年に「突然発生し」数ヶ月続いた、という理解が今日まである。しかし、現実には、はるかに困難な状況にあった。1920年代初頭のアルヒーフ所蔵資料・新聞・その他の刊行資料の分析結果によれば、沿ヴォルガドイツ人自治州では、飢饉は1920年末にはじまり、その後拡大と後退を繰り返し、1920年まで続いた、と言ってもよい。

1 1921年春——危機の始まり

1921年春の播種は、ドイツ人共和国では、事実上不可能であった。これについては、主要食物栽培の播種地面積の激しい減少が物語っており、それは表3-1にみることができる。

表3-1 沿ヴォルガドイツ人自治州における
播種地の減少：1921年

農作物	播種地面積（デシャチナ）		
	1920年	1921年	1920年に対する1921年の比率
ライ麦	158,500	130,077	82 %
小麦	346,500	31,100	9 %
カラス麦と大麦	34,900	4,120	12 %
ジャガイモ	9,030	3,372	37 %

ライ麦の比率が高いのは、播種が 1920 年秋に行われたことによる。当時、州内の状況は、確かに困難ではあったものの、未だ 1921 年初頭の何ヶ月かほどの厳しさにはなかった。食糧徴発隊の冬期「攻勢」があり、農民蜂起による種子フォンド強奪があった後の春には、実際、播種すべき種子は何もなかった。州内に保蔵されていたわずかな種子の残量が州執行委員会の特別委員会の指導によって農民に配布され、農民はその種子を播種したが、もちろん、すべての農民に種子が行き渡ったわけでは決してなかった。

州革命委員会は、州内の種子の購入・販売・輸送にたいするあらゆる制限を 3 月 1 日より撤廃したが、これは、一定の積極的役割を果たした。しかし、この措置は、概して、その経済的効果より政治的効果の方が大きかった。荒廃した州内においては播種用種子を入手することは非常に困難であった。

このようにして、すでに 1921 年春には、その年の秋の収穫が乏しいであろうことがはっきりし、州は、飢饉とその克服の問題をきわめて深刻に受け止めるなければならなかった。全ロシア中央委員会・ロシア共産党中央委員会ドイツ局・食糧人民委員部からなる特別委員会が非常事態のために当地に到着したが、その委員会と州幹部との合同会議においては、まさにこの問題が中心となった。会議は 4 月 17 日と 18 日に行なわれ、委員会は、州内を巡視し、4 月 26 日、最終的決定を下し、勧告をした。

労働・国防ソヴェト議長ヴェ・イ・レーニンは、沿ヴォルガドイツ人州の請願に応じて、小麦 10 万プードを州に配給するようという指令をサラトフ県革命委員会に発したが、サラトフ県は、この指令の遂行を拒否した。というのも、県としては播種用に 300 万プードの小麦が必要なのに全部で 50 万プードしかなく、県も州と同じほどに危機的状況にある、というのである。とくに、食糧人民委員部代表のミルトフは、つぎのように述べた。「・・・ドイツ人コ

ミューンにはそれでも穀物があり・・・、農民は、畑に播種している。それは、計画よりは実際少ないが、それでもここで予想されているよりは多い。サラトフ県の食糧事情は州よりはるかに悪く、援助物資を引き出す余地はどこにもないであろう。要するに、サラトフ県から 10 万ブードをも持ち出すことは、許しがたいことなのである。」

播種月間が終わるまでに文字通り 314 日残っていたが、このあいだに上記の量の穀物種子を州に届けて農民に配布することはいずれにせよできないだろうという判断から、この問題は議題から除かれた。10 万ブードではなく 3 万ブードの小麦をレーニンに請願するという決定がなされた。それだけの量であったら、受納して播種する時間はまだあるだろうと考えられた。

中央政府からの委員会が州内での作業の総括としてまとめた結論は、悲観的なものとなった。結論のうち、状況の厳しさを示す若干の項目だけを引用しておこう。

- 「1. 州は、きわめて困難な経済的・政治的状況にあり、これは、不作、ひどく不十分な播種、食糧徴発、破壊行為、暴動の結果である・・・。
6. 食糧徴発の实际的活動は、計り知れない政治的・経済的弊害を州にもたらしており、それは、とくに、住民の言葉や生活習慣を知らない食料徴発隊の活動について言うことができ、食糧徴発の活動員の集団的醜行や個人的犯罪行為が確認されている。
7. 中央政府は、州の経済状態について正確な情報を与えられておらず、その政治および党の事情について十分な情報を与えられていなかった。
8. ロシア共産党中央委員会は、無駄な出張命令や重要ポストへの無益な任命、政治的衝突に対する筋の通らない動揺した対処にみられるように、州との関係において一連の大きな誤りを犯した・・・。」

委員会は、「・・・州は、経済的・民族的単位として、維持されなければならない」という、明快な結論を示した。沿ヴォルガドイツ人州に生じた困難な状況を克服すべく、委員会は、一連の実際的な方策を提起したが、そのなかには次のようなものがあった。

「15. 菜園用種子発送の指令を食糧人民委員部に要求し、拒否された場合には、自由市場で買い付けること。

16. 卵、バター等の徴発に際しては、地域食糧委員会にしかるべき回状を送り、圧力はかけないこと。

17. 飢餓で死者の出た家族を援助するために軍革命委員会が自由にできる一定量の食料備蓄を確保し、若干の食糧援助について中央に請願すること・・・。」

委員会の結論と勧告は、事態を非常に雄弁に物語っている。まず第一に、それは、沿ヴォルガドイツ人州におけるきわめて困難な状況を、1921年4月にはそこですでに飢餓が蔓延して人命を奪っていたという事実を、無条件に認めている。第二に、そこでは、州内に生じている劇的状况に対する中央政府の責任が明確に認識されている。第三に、州がこうした条件にあっても、農民を「急襲」して食料品を巻き上げるという行動が続いていた、ということを示している。そして、第四に、沿ヴォルガドイツ人州を覆っている深刻な危機に対する即効の克服策を委員会は実は見出し得ないでいた、ということを示していた。州とその住民の実際の運命は、州にたいする食糧援助を中央政府が決定するか否か、にかかっていた。多くの問題を持て余していた中央にとって、小さなドイツ人州に関わっている余裕などはなかった。

5月3日、ロシア共産党中央委員会組織局の会議において、ヴェ・エム・モロトフの指導の下、沿ヴォルガドイツ人自治州から帰ってきた委員会の活動の結果が検討された。きわめて曖昧で不明瞭な決議がなされた。州にたいして

「最低限の食糧備蓄」を供与する必要が認められたが、しかしそれは、食糧人民委員部がこの課題を遂行することができる場合に、ということであった。州からの食糧税徴収については、組織局は、この問題は「民族人民委員部と協力してそれを解明するまでは懸案としておく」と決めた。つまり、飢餓に苦しむドイツ人自治州の援助に関する具体的決定は無期限に引き延ばされたのである。

2 危機の進展

その間に、州内の状況はさらに悪化していった。5月初めに、州執行委員会は、ロシア共産党州委員会の提案により、飢えた子供をなんとか助けようと、彼らの食事のために3000プードのキビを種子フォンドから供出した。州内に漁業を起こすという試みが企てられ、穀物を所有する農民のために、いくつもの製粉所と製油所が開設されている。しかし、こうした処置は、もちろん、飢餓問題を解決することはできなかった。

5月には、州から移住していく動きが始まった。最初に自分の村を去って行ったのは、農民-「非播種者」、つまり穀物を播種できず、したがって何も待つものがなかった人々であった。

州内における中央政府の委員会の活動結果を踏まえた全ロシア中央執行委員会の決定は、ようやく5月21日になって出された。しかし、それは、当惑、憤慨そして失望以外の何物をももたらさなかった。そこには、とくに、文字通り次のように述べられていた。すなわち、「最小限の食糧備蓄を州に供出することが望ましく、この問題の解決は食糧人民委員部にまかせる。」つまり、ロシアソヴェト連邦社会主義共和国の最高の国家権力機関は、ドイツ人自治州の問題に対して、すばやくそれを具体的に解決するというのではなく、輕蔑的・官僚主義的態度を示し、州を食糧人民委員部の慈悲にまかせたのであり、そし

て、まさにこの食糧人民委員部の活動が州を悲劇的状況に導いた。沿ヴォルガドイツ人自治州の問題に対するこのような解決方法には見通しがなかったが、何の疑いをもひきおこさなかった。というのも、ちょうどこのころ、食糧人民委員部は、自らの「確固とした決意」を表明しており、食糧徴集を厳しく行なうようにと要求する電報をマルクスシュタットに送っている。電報には、「あなた方には、農産物徴発の遂行という、きわめて具体的な課題がある」、と記されていた。全ソ連邦共産党第10回大会の決定は存在しなかったかのようである。食糧人民委員部の要求は、いつものことながら、逮捕という脅しによって、日用工業製品などの生産の権利を同時に奪っていた。

ドイツ人州と中央政府とのあいだには、相互の無理解という、出口のない壁が生まれていた。ヴォルガ流域の小さい州の問題は、中央からしてみれば、注意を払うにはあまりに些細なものだったのである。

全ロシア中央執行委員会の決定を受け取った直後に、ロシア共産党中央委員会州委員会と州執行委員会の緊急合同幹部会議が開かれた。会議では、全員が全ロシア中央執行委員会の立場を厳しく批判した。会議の出席者たちは、「全ロシア中央執行委員会の決定には不満足である。というのも、我々は、即座の物質的援助と確固たる精神的支えを必要としているのである」、と指摘した。このような考えは、会議の基本的主張として、その決議のなかに入れられた。その他に、採択された文書は、「民族問題に関する第10回党大会の決議に即した、沿ヴォルガドイツ人州に対する政策の実行・・・」を要求した。加えて、ロシア共産党中央委員会と全ロシア中央執行委員会とに州執行委員会議長ア・モールを派遣することを決定し、採択された決議の「根拠をより詳細に説明する」報告をそこで行なうよう依頼した。

同時に、州執行委員会の決定により、沿ヴォルガドイツ人州飢餓者調査特別委員会が設置された。委員会は、6月初めに無作為に選んだ数地区を調査し、

ドイツ人自治州における飢餓とその結果が大変ひどい状態になっていることを立証する報告書を準備した。

報告書では、すでに 1921 年の新年を迎えるころに「きわめて多くの村で」パンがなかったことが指摘されていた。食糧の支えを奪われた人々は、家畜の一部を屠殺せざるを得なくなり、そして、飢えがさらにひどくなるにつれて、家畜を見境なく大量に屠殺しはじめた。もっとも富裕なわずかな住民は、3 月、4 月ころまではまだ自分たちのパンで持ち堪えることができたが、その後は、彼らさえも、家畜を屠殺し、農機具や家財道具などを売らざるを得なかった。

「現在の状況は次のようである。住民の大半を占める貧農と中農は、すでに自分の農機具、家財道具そして建物さえをも売り払ったり食糧と交換したりしており、彼らは、死滅しつつある。というのも、彼らには、現金がなく、パンと交換できるようないかなる物もないので、自由市場でパンを獲得する力はまったくないのである。住民のうちのわずかな富農は、現在、もっぱら自分の農業経営を放置することによって、生きている。莫大なパン需要のために、農機具、建物、機械、衣類そして靴類は、ほとんど何の価値もなくなってしまった（刈取機が焼きパン一個と交換されている）……。

現在、住民は、草本、雑草、タマネギ、ニンニク、動物の死体、犬、猫、クマネズミ、カエル、ハタリス、ハリネズミ、ヴォルガ川沿いの村で集めた魚を食べている。住民のうちのわずかな者は、残っている酪農家畜や役畜を食べてしまっている……。」

特別委員会の指摘によれば、飢えに苦しみ、収穫の見通しも期待できず（播いた種子が少なく、5 月からは旱魃が始まっている）、また、外部からの援助は何も期待できず、住民は、農業経営を放り出し、シベリア、トルキスタン、クバンなどへ移住しはじめていた。しかも、逃亡はパニック状態になり始め、

日々激しさを増していた。たとえば、パーニン地区からだけでも、5月から6月初めにかけて655家族——住民の10%——が出て行った。

報告書には、発生した悲劇の規模が判断できるような、いくつかの数字も挙げられている。上記のパーニン地区では、2月から6月までの時期に498人が飢死し、バリツェル郡のアントン（セヴァスチュノフカ）村では、同じ時期に510人が死亡した。ニデルモンジュ村では、6月のある1日だけで、10人が飢えで命を奪われたという。

委員会は、報告書の最後で、次のようなまったく単純明快な結論を示している。「……州の住民は、きわめて恐ろしい飢えに耐えて生きている。緊急の大量援助が必要である。そうでなければ、州は荒廃し、数十年は回復することはできないであろう。」

3 中央政府との交渉

州執行委員会議長ア・モールは、1921年6月にモスクワに出かけ、食糧人民委員部、全ロシア中央執行委員会幹部会そして全ソ連邦共産党中央委員会と交渉したが、その際に基本資料として提出されたのが、沿ヴォルガドイツ人州飢餓者調査特別委員会の先の報告書と州委員会・州執行委員会合同幹部会の決議であった。交渉は、非常に難航し、とくに食糧人民委員部との交渉は困難を極めた。食糧人民委員部の代表たちは、州内に発生していた状況について真剣に考えようとはせず、それよりもまず、州の「今年の農産物徴発は最低であった」として、ア・モールを非難した。食糧人民委員部幹部会議のメンバーであったア・スミルノフは、「沿ヴォルガドイツ人州執行委員会を信用できるかどうか」という疑問を表明し、食糧獲得ために少しでも在庫品を分配して欲しいというア・モールの請願に対して、消極的に冷たく対応した。

全ロシア中央執行委員会幹部会では、ア・モールに対して、「ドイツ人にはまだパンがある。もしも我々が彼らを助けるとすれば、政治的判断からだけである。なぜなら、彼らはドイツ人である」と、率直な説明がなされた。

ソヴェト共和国の上記の中央機関がドイツ人州にたいしてこのような非論理的・非常識的態度をどうしてとり得たのかは、理解するのが非常に困難である。ゲルマンは、純粹に心理的要因がそこに作用していたに違いない、という。ドイツ人の村々は、数十年来、沿ヴォルガだけでなくロシア全体のなかでも最も条件がよく、ドイツ人入植者には常に豊かで安定した収穫があり、穀物は彼らの主要な商品であり、国外向けにも販売されていた。多くの人々の意識のなかには、用心深く、物惜しみをし、儉約家であり、そして、人生のどのような時にあっても常に糧食を用意しているという、ドイツ人「バウエル（農民）」の明確なステレオタイプができあがっていた。当時、もしもドイツ人村がすでに飢えているというなら、他の村々の状況がそれより良いはずはない、という考えが横行していた。

食糧人民委員部や全ロシア中央執行委員会とは異なり、民族人民委員部は、ドイツ人自治州の問題に理解を示した。交渉の結果、民族人民委員部との間には、早くも6月にはドイツ人州に3万プードのパンを、そして、さらに7万5千プードの食糧が得られる交換用商品を送り届ける、という合意が達成された。

事態を急展開させたのは、ロシア共産党中央委員会にたいするア・モールの訪問であった。彼の報告はそこで、理解と同情をもって迎えられた。その点で少なからぬ役割を果たしたのは、中央委員会ドイツ局の予備作業であった。その後、中央委員会は、全ロシア中央委員会と食糧人民委員部にしかるべき圧力をかけ、ドイツ人州に対する両者の態度を徐々に変えさせた。7月中旬、中央からの最初の援助が沿ヴォルガドイツ人自治州に到着しはじめた。しかし、そ

の規模は州の必要を満たすようなものでは決してなく、飢餓の進展を阻止することなどできなかった。

4 1921 年夏——飢餓状況・中央政府の対応・現地の飢餓者調査委員会

(1) 飢餓状況

州執行委員会幹部会で指摘されたところによれば、7月1日現在、沿ヴォルガドイツ人州において飢えに苦しんでいた人はすでに29万9000人を数え、それは州の人口の4分の3を超えていた。旱魃が状況をさらに深刻にした。7月までに、春播き穀物の収穫はないであろう、ということが決定的に明らかとなった。草という草は枯死し、州内には家畜用の牧草は何もなかった。

州の農業を全滅させずに春播き穀物と牧草の不作をなんとか埋め合わせるためには、州執行委員会の土地課が計算したところによれば、州の農民は、秋に23万デシャチナほどの土地にライ麦を播種する必要があった。というのも、

「極端な不作の故に・・・、春には家畜も播種用種子も残っておらず、春播き畑の収穫を考えることはまったくできない」からであった。しかし、州が自からの種子で播種できたのは、2万デシャチナに過ぎなかった。残りの土地に播種するためには、さらに105万プードの種子が必要であった。州は、これだけの量の種子を農業人民委員部に申請した。州の家畜をせめて一部でも救うために、冬には隣接するキルギス自治ソヴェト社会主義共和国のステップに家畜を追立てて移動させる、という話合いがまとまった。

この年、旱魃による農業被害は、沿ヴォルガドイツ人州においてだけではなかった。1921年7月21日、新聞『プラウダ』は、共産党の全党員と全組織に対する呼びかけを發表したが、そのなかで次のことが確認されている。「凶作は、サマーラ州、ウラリスク州、タタール共和国、アストラハン州、ツァリー

ツィン州、ドイツ人コミューン、チュヴァシユ州、そして、部分的にヴァトカ県、ペンザ県、オレンブルク県、その他の諸県に広がっている。」旱魃が続いて、飢餓が起こった。1921 年夏には、飢餓は、国全体の災害となった。ソ連の歴史家ユ・ポリャコフは、飢餓は沿ヴォルガ地方と沿ウラル地方の全域、カザフスタン、ドン州、西シベリアの一部、南ウクライナの若干の地区などを襲っていた、と指摘している。彼の計算によれば、1921 年には、国民の 20%、農村人口の 25%以上が、飢えに苦しんでいた。

（2）中央政府による調査と施策

災害が広範囲に及び、ソヴェト共和国の指導部は、被災地区に注意を向けざる得なくなった。7 月中旬の数日間、全ロシア中央執行委員会のニージノエ・パヴォルジエ（ヴォルガ下流域地方）収穫高調査委員会は、ドイツ人コミューンにおいて調査活動を行なった。その委員長ネムツォフの説明によれば、委員会がやってきた目的は、「州の実情を明らかにし、窮境から州を救い出す一連の具体的措置を講ずること」にあった。委員会は、州内のいくつかの地区を視察し、上に述べたような住民の窮状の事実を確認にした。その他に、彼は、次のことを指摘している。「7 月 15 日以降、労働者による児童施設への食料品支給は、支給する食料品がなく、中断している。俸給は、現金がなく支払われておらず・・・、公共給食施設用の食料備蓄は尽きており、7 月 21 日以降、州の飢餓者援助委員会が開設していた食堂はすべて、閉鎖されている。」

調査委員会は、沿ヴォルガドイツ人州には「極めて精力的な、即座の、そしてできるだけ広範囲の外部援助」が必要である、と結論した。委員会は、最後に、次のようなことを指摘していた。「・・・穀物（秋播き、春播き）に対する現物税の徴収は不可能であると認め、したがって、州執行委員会は国家フォンドおよび県フォンドのための穀物現物税の徴収を撤廃し、それを行なうべき

ではない、と命ずる。同じ理由から、干し草に対する現物税の徴収を取り止めるべきである。肉に対する現物税の徴収は、物々交換用に県ファンドのために行なうべきである・・・。」

州執行委員会は、「俸給支払と公共活動の報酬支払とのために、食料調達作業のために」30億ルーブリを州財務局へ即座に送金してもらうこと、そして、「すでに耕された休耕地23万デシャチナに播種する秋播きライ麦の種子105万プードを州に送り届けてもらう」ということを要求していたが、調査委員会はその正当性を確認した。住民を餓死から救うために、食料人民委員部には、「6月に提示されたノルマ削減から計算して3万7617プードの、一ヶ月分の国家計画配給穀物の貨車を州に向けて即座に出」し、「飢えに苦しむ住民に対する公共給食用の穀物を、少なくとも1ヶ月分、せめて30万人分、緊急に州に送り届けるべきである」、と命ぜられた。

全ロシア中央執行委員会の調査委員会は、州の経済部局に対して、一連の措置を実施するように命じたが、そのなかには、ゴメリ県、クールスク県、スモレンスク県およびペルム県に向けて物々交換用の貨車を用意する、ということも含まれていた。この目的のために、州内の国の諸官庁の倉庫にあるあらゆる物品を、そして、この地方の工業企業やクスターリ作業所で製造された製品を使うことが許された。また、州には、食料との交換場所に物品を輸送するために鉄道従業員の業務や汽船・艇の運航を順番外に意のままにする権利が与えられた。

飢えに苦しむ5千家族は、収穫のある県に住む親類のところに向かって、州を自由に出て行くことが許された。調査委員会は、全ロシア中央執行委員会に対して、馬無し農民の家族全員を収穫のある県のソホーズに労働力として組織的に移住させる、という処置を願い出ることにした。教育人民委員部に対して

は、孤児施設と身体障害者養護施設を国内の恵まれた地区に移す、ということ
を提案することになった。

このようにして、全ロシア中央執行委員会の調査委員会は、州を破局から救
うことができるような、あるいは少なくとも飢餓の進展を阻止し得るような、
いくつかの重要な決議を行なった。しかし、そうした決議を具体化する作業は、
まったく遅々としていて、徹底しておらず、決議の一部は、結局、実行されな
いままに終わった。その上、中央からは、州指導部を当惑させ狼狽させる指令
が到着し続けた。とくに、州執行委員会は、全ロシア中央執行委員会の調査委
員会が州から去っていた後の 1921 年 7 月 25 日、ヴェ・レーニンとエヌ・ブリ
ュハノフの署名した電報をモスクワから受け取ったが、そこには、地方当局に
たいして、「当面の食糧キャンペーン遂行のために彼らが責任を担うべき非常
事態に対する無理解」が厳しく問われていた。また、「現物税額は従来 of 全国的な農産物徴発量よりもかなり低く決められている」のに、あらゆる口実をも
うけて「設定の税率を引き下げて欲しい」という請願が中央に殺到している、
と指摘され、「断固として現物税を徴収するように、あらゆる手段を講ずるべ
きである」と指令されていた。

大規模な飢餓の最中に食糧税を徴収するという試みは、この問題の倫理的側
面はともかくとして、事前に失敗が運命づけられていたことはきわめて明白で
あったが、誰の指令を遂行すべきかは考えなければならず、食糧税の徴収は、
ともかく続けられた。8 月 18 日の州食糧委員会の参事会においては、そのメ
ンバーたちは、州執行委員会に対して、「さまざまな機関が食糧事業に介入し、
中央の食糧政策とは根本的に異なる指図を現場で発すること」について抗議し
た。参事会メンバーは、こうしたことにより食糧事業に混乱が起こっており、
「食糧税の徴収はうまく行かず、挫折している」と指摘していた。8 月 19 日、
マルクスシュタットには、全ロシア中央執行委員会議長エム・カリーニンが中

央諸機関の何人もの代表を伴って汽船で到着し、一日訪問した。「全ロシアの長老」は、まさに栈橋で、州の責任者と協議した。州執行委員会委員長ア・モールは、現状を報告した。彼は、旱魃のために州の収穫は75%もだめになった、と伝えた。残された農地での収穫はデシャチナ当り1・5ブードである。家畜に食べさせる飼料が何もなく、家畜頭数は破滅的に急減している。飢餓が広範に猛威をふるっている。約4万人がパニックにあった。国の最高指導部には、即座の食糧援助の問題をすでに何回も提起してきている。ア・モールの報告は「考慮され」、州を破局から救うための若干の具体的問題が検討された。そのなかには、州飢餓者援助委員会の創設という問題があった。

すでに1921年7月21日、エム・イ・カリーニンは、「全ロシア飢餓者援助委員会に関する全ロシア中央委員会布告」と「全ロシア飢餓者援助委員会に関する規定」に署名していた。この委員会のメンバーとして名前を連ねたなかには、十月革命前の一連の有力政治活動家（エス・プロコポヴィチ、エ・クスコーヴァ、エヌ・キシュキン）、そして、西欧でも権威をもっていた、ロシアの科学・文学・文化の優れた代表者たち（ア・カルピンスキー、ア・フェルスマン、ア・チャヤーノフ、エム・ゴーリキー、カ・スタニスラフスキー）がいた。委員会には、広範な権利・権限が与えられた。しかし、もっとも重要であったのは、ソヴェト共和国の指導部が委員会の助力を得て、当時非常に必要とされた外国からの食糧援助の獲得を決めたことである。全ロシア飢餓者援助委員会がその活動を成功させるためには、県、郡等の現場における自らの機関が必要であった。まさにそれ故に、沿ヴォルガドイツ人州にも飢餓者援助委員会を設置するという問題がおこった。

（3）現地の飢餓者援助委員会

8月1日のロシア共産党州委員会会議において、飢餓者援助委員会設置の問題について激しい討議が行なわれた。多くの共産党員は、「長老の社会活動家」代表を委員会メンバーに含めよという全ロシア中央執行委員会の要求は彼らの権威を強めることになり、それは共産党員が大衆のなかで活動することの妨げになるであろう、ということを心配した。また、現場の委員会では「旧派」の割合を構成員の3分の1以下にするよう、中央に請願することが提案された。しかし、この問題は、州委員会委員のあいだで意見の一致をみることはなく、その解決はエム・イ・カリーニンに任せられた。

全ロシア中央執行委員会議長は、州指導部に対して、明らかに、権威ある旧派社会活動家を含めて州飢餓者援助委員会を構成するのが妥当であり必要であることであると納得させたようで、文字通り数日後には、そのような委員会が沿ヴォルガドイツ人州に設置された。委員会の設置は、1921年8月25日、州執行委員会幹部会会議で行なわれた。委員会議長には州執行委員会委員長ア・モールが、副議長にはロシア共産党州委員会書記長ゲ・ケーニグが任命された。委員会のメンバーには、種々の州機関から14名が入り込んだ（州食糧人民委員ア・ミレル-マリス、州執行委員会の各部局長——ア・フクス、エ・イヴァーノフ、ア・マイジンゲル、エス・コロチロフ、イ・シュヴァーブ等々）。

州執行委員会幹部会は、次のような決議を行なった。「飢饉との闘争に自らの経験・知識・活力を生かしたいという若干の元社会活動家の希望を考慮し、飢饉との闘いの活動に地方の元社会活動家を参加させることは、望ましく、可能であると認める。しかし、州の面積が非常に小さいということを考慮し、活動における重複を避けるために、そして、飢饉と闘う活力を実際的に有効に使うために、この活動の機関はただ一つだけ設置し、そこには旧社会活動組織の代表をも——飢餓者援助委員会の正規のメンバーとして——含める、ということが必要と認める。」

州飢餓者援助委員会の第1回会議は、1921年8月28日に開催された。その委員会のメンバーには、最初から、ア・エミフ、エリ・ノヴィコフ、ア・シュレーゲリ、ペ・シュレーゲリ、エフ・ユング、イ・ドルツヴァイレル、ア・ファルレル、ア・サベリフェリド、エフ・ストルイピン、エフ・リップルト、エヌ・ノルスキーといった、総数11人の積極的な元社会活動家のグループが加わっていた。州飢餓者援助委員会の委員は、自分たちの努力をいかに結集するかの問題を検討したが、その前日の8月27日にモスクワで全ロシア飢餓者援助委員会が解散させられたこと、そしてそのメンバーであった元活動家の多くが反革命的活動の罪でルビャンクのチェーカー（全ロシア反革命怠業取締非常委員会）精神刑務所に送られたということは、まだ知らないでいた。全ロシア飢餓者援助委員会に代わって、全ロシア中央飢餓者援助委員会が活動しはじめたが、そのメンバーには、一連の中央国家機関の代表が入っていた。

州飢餓者援助委員会は、その構成員のほぼ半分が「長老の」社会活動家からなっていたが、全ロシア委員会とは異なり、1年以上、1922年9月のその解散まで、友好的に問題なく活動していた。

州飢餓者援助委員会の第一回会議において、その幹部会、一連の部局——児童、経済・調達、公共給食、移住、公共労働——、そして監査委員会が組織された。このような下部組織のそれぞれに、共産党員ならびに「長老の活動家」が参加した。

9月5日、州飢餓者援助委員会は、沿ヴォルガドイツ人自治州の住民に呼びかけて声明を発し、そのなかで、委員会を組織したこと、近い将来に中央からの援助が到着しはじめること、それぞれの村に相互援助委員会を創設する必要があることについて、そして、飢饉と闘うために委員会が決めた措置について、知らせた。声明では、とくに、次のように述べられていた。「中央政府の措置の他に、地方委員会は、飢えに苦しむ同胞への援助を同国人に呼びかけるべく、

シベリア、トルケスタン、ウクライナそしてカフカースに代表団を派遣する。ドイツやアメリカへの代表団派遣もあり得る。上記の地域に親類のいる人は誰でも、手紙を書き、我々の代表団を通じての貨物あるいは郵便での「プード袋」によって食糧を届けてもらうよう、自分の方から熱心に援助を請うて下さい・・・。」

9月の下旬に、各郡に、飢餓者援助委員会が設置された。委員会を構成したのは、郡執行委員会委員長、ロシア共産党郡委員会書記長、国民教育・社会保障・労働者-農民監督の各部局職員であった。同じ時期に、村々には、現場で飢饉と闘うあらゆる活動を州執行委員会幹部会の決定により命ぜられた、相互援助委員会が設置された。

州内に飢餓者援助委員会と相互援助委員会が設置され、飢饉との闘いはより組織的な性格をもつようになったが、そうした機関の活動の効率は、とくに初期の段階では、低かった。その主要な理由は、中央からの食糧援助の到着が不規則で、その量も非常に限定されていた、ということにある。州飢餓者援助委員会の設置の一ヶ月半後、委員長ア・モールと書記ア・ノヴィコフは、全ロシア中央飢餓者援助委員会に対して、次のような報告を行なった。「委員会は、これまでのところ、州の各都市に給食所と赤貧者宿泊所をそれぞれ一ヶ月開設し、500人の子供をチラスポリに疎開させることしかできなかった。その間に、困窮と恐怖は日々ひどくなっている・・・。」

州飢餓者援助委員会は、1921—1922年のいわゆる州「飢饉」予算を準備し、中央に申請した。そこから明らかになったことであるが、州は、収穫および商品交換と買占めによる（すなわち自らの資金による）入手により、78万2400プードの穀物を予定していた。しかし、当期の支出予算としては、秋播耕地と春播耕地の播種、州の住民の食物そして家畜の飼養のために最低限744万7824プードは必要とする、と説明されていた。

こうして、「飢饉予算」で指摘されていたように、州を壊滅状態から救うためには、次の1922年の収穫までに666万5334プード（約10万5000トン）もの量の穀物援助が州になされる必要があった。その際、105万6700プードは、秋播に使用しなければならず、緊急に調達する必要があった。ここで指摘しておかなければならないのは、災害に見舞われた州が自らのためには1918—1921年に州から搬出したよりもかなり少ない量を願い出ていることである。

（4）中央政府の援助

エム・イ・カリーニンによる沿ヴォルガドイツ人州訪問および州飢餓者援助委員会の設置の後、援助問題に対するソヴェト政府中央諸機関の態度は変化しはじめた。中央は、明らかに、住民が飢えに苦しんでいる地域の危機的状況を十分に認識した。州援助の最初の重要な一歩となったのは、秋播きの穀粒を州に確保することであった。1921年9月の1ヶ月間にサラトフⅡ、ポクロフスク、カムイシン、メドヴェディツァの駅には、沿ヴォルガドイツ人州のために、54万6000プードを超える穀粒を積載した貨車が約600台到着した。その他に、2万4000プード以上が州の協同組合によって用意された。

州執行委員会と飢餓者援助委員会は、穀粒の受入れ、供出受付所へのその輸送、警備組織、農民への穀粒配給と播種のために、精力的に措置をとった。農民経営には直接約49万4000プードが、コルホーズとソフオーズには2万3000プードが引き渡された。遅れて到着した穀粒の一部（約3万プード）は、州執行委員会を通じて、飢えに苦しむ住民の食糧となった。

ドイツ人農民に対する国家の播種用種子の援助は、大きな政治的・精神的意義をもった。何年もするうちに、穀物は農民からのみ、しかもしばしば強制的に奪い取るものだ、ということに農民は慣れてしまった。飢饉が始まったとき、多くの人々には気力がなく、救済の道は見い出せなかった。ドイツ人州の住民

の気持は、ロシア共産党州委員会の中央委員会宛報告書の一つ（1921 年 7 月）のなかで、次のように記されている。「住民は意気消沈しており、すべてに対して一種の宗教的宿命論と無関心とを示している。彼らは、革命のなかに、罪ゆえに人々を罰するような最高の神の裁きを見ている。彼らの考えでは、聖書には最後の審判あるいは千年王国の前で立ち止まる時間について述べられており、他の有り様はなかった。」

農民に対する穀粒の引渡しは、その多くが農民を出口のない状況から救い出した。農民には救済に対する希望が生まれた。無気力が影を潜め、積極的な耕作労働が見られるようになった。9 月に州内では農家の 80%ほどが飢えており、餓死が大規模に広がっていたにもかかわらず、実際すべての播種用種子が播種された。州全体では、播種用に受け取った穀粒を食糧にまわすという事例は個々に指摘されているだけである。何世紀もの間に熟成された農民道徳が働いたと言われる。ソヴェト権力に対する農民の態度も、本質的に改善された。彼らは、ソヴェト権力のなかに自らの惨禍の原因だけを見ろということとはしなくなった。1921 年 9 月には、少なからぬ数の感謝の手紙が、州のソヴェト権力機関に送られてきていた。

国家による種子援助によって、農民は、州全体で秋播き種子を 11 万 9500 デシャチナに播種することができた。これは、もちろん、平年の播種量には大きく及ばなかった。しかし、飢えに苦しむ農民によってこのとき播種されたライ麦は、翌年のなお非常に苦しい年に、何千人もの生命を餓死から救うことを助けた。

5 1921 年秋の飢餓状況

しかし、1921 年秋の収穫では、いくつかの村で、飢えていた農民が急に食料にありつけたということにより、次のような悲劇もひきおこされていた。

「農民は、せめて一度でいいから鱈腹食べられるよう、収穫をじりじり待っていた……。農民のほとんどは1月あるいは2月からパンを見ることはなく、彼らは、なかでも子供は、最初に焼き上がった菓子（レペーシュカ）を食うように食べた。このような飢えの後では、ほとんどすべての人が新しいパンを必要以上に食べ、胃はすでにパンとは疎遠になっており消化吸收するのが困難となっていたので、腹一杯食べてしまった不幸な人たちはすぐに病気になり、ひどい苦しみのなかでほとんど家族全員が死んで行った。」

また、何らかの種子を与えられて畑で栽培することができた人々でも、収穫した穀物は食糧税として納入しなければならなかった。奇異に見え理解し難いのだが、農産物徴発制度は、そしてその後の食糧税制度——飢饉の状況にあっては実質的に農産物徴発制度と少しも異ならなかった——は、実際に 1921 年を通じて、大規模な飢饉のなかでさえ、確固とした制度として機能した。そのために、個々の農民による自然発生的で散発的な抗議運動が再三発生した。そうした農民は、実際には当局を威嚇するようなことは何もしなかったが、それでも厳しく処罰された。州当局が「いいかげん」にしか自分の義務を果たしていないと判断した食糧税徴収官も、一緒に処罰された。このような状況のなかで、1921 年 10 月末、「州は中央からのあらゆる税から解放されており……。税は我々のマルクスシュタット行政官から要求される」という判断を農民の間に示していた女性教師アンナ・レオンハルトが、チューリヒにおいて逮捕された。ほぼ同じ時期に、ウンテルヴァリデンスク・ソヴェト議長フィンクとシャフガウゼン・ソヴェト議長グイオは、「不十分な食糧税徴収作業のために」逮

捕された。もちろん、1921 年秋には、食糧税として集められた食糧はもはや州の外部には搬出されず、州内で配分された。しかし、この配分は、問題を解決するにはいたらなかった。ある人たちを餓死から救うが、それは同時に、他の人たちの生存の希望を奪ったのである。

その間に、飢饉は、ゆっくりではあるが間違いなく進展し続け、その様相は、次の表から顕著に読み取ることができる。

表 3-2 沿ヴォルガドイツ人州

における飢饉の進展

月	飢餓経営数	経営総数に対する比率
8 月	33,373	56.7%
9 月	46,820	79.6%
10 月	52,630	89.5%
11 月	55,117	93.7%
12 月	56,219	95.6%
1 月	57,017	95.9%

残念ながらその後の月については正確な数字が手元にないが、1922 年の 2 月、3 月、4 月には、沿ヴォルガドイツ人州の飢饉はまさにピークに達し、この時期は住民の多くにとって破滅的となった。したがって、1922 年春には州の住民は一人残らず飢えていた、と言っても決して誇張ではない。こうした状況では、いかなる相互援助も再配分も顕著な成果をあげることはあり得なかった。飢饉の問題を解決できるのは、外部からの食糧搬入しかなかった。すでに指摘したように、この点で最初の本格的な措置が 1921 年 9 月に講じられた。播種用種子の調達に続いて、その他にもいくつかの処置が取られた。

6 国内からの食糧援助

1921年9月13日、中央餓死者援助委員会は、州に対する援助をゴメリ県とブリャンスク県に願い出ることを決定した。少し遅れて11月には、さらに第三の県としてヴィテブスク県が指定された。これらの県からはこの年の末までに食糧が到着し始めたが、その量はわずかであった。たとえば、ゴメリ県から到着した食糧の貨物は、11月に2千プード、12月に1万プード、1922年1月に4千プード、2月に1万プード、3月に2万プード、4月に3万プード、5月に4万プード、6月に6万プードであった。ゴメリ県は、総量として、1ヶ月に1人当たり10フントの食糧と計算して、飢餓者23万5000人を9ヶ月間食べさせるだけの量が義務付けられた。ブリャンスク県もまた、同じ計算で9ヶ月間、12万5000人の飢餓者を養うことを引き受けた。これらは国家からの調達ではかった。ゴメリ、ブリャンスク、ヴィテブスクの三県に対して、食糧税を撤廃したり、その負担を軽減するようなことはしなかった。これらの県から沿ヴォルガドイツ人州には、追加的に供出させたものが運ばれたのであり、そのためには、農民経営からの差引量が引き上げられ、労働者・事務職員からの差引量は10%とされ、土曜労働や日曜労働などによって手に入れた報酬が使われた。

上記の三県それぞれには、沿ヴォルガドイツ人州の代表が常時2万5130人駐在し、県内で集められた食糧の搬出を組織していた。

1921年9月末には、ウクライナ、カフカース、シベリアにおけるドイツ人入植者から寄付を募るために、沿ヴォルガドイツ人州から代表団が出発した。また、それより以前に、ドイツ人州消費組合同盟(Nemoblsoyuz)は、州内にある工業的商品、州内企業の製品、農機具などをすべて手中に収め、収穫に恵まれたさまざまな県において、これらの商品をすべて穀物と交換することを始

めていた。いくつかの県に、たとえば家畜飼料・干し草を求めてヴォロネジ県、ペルム県などに、視察団が派遣されたりもした。

7 疎開

1921年7月28日付の全ロシア中央執行委員会幹部会決定にしたがい、早くも8月から、1万人の飢餓者を州から疎開（移住）させる準備が開始された。9月末、疎開する人たちはすべてマルクスシュタットの棧橋に集められた。そこに彼らのための汽船が到着するはずになっていた。しかし、中央の諸機関とくに中央疎開委員会（Tsentrrevak）の甚だしい怠慢により、2ヶ月間は、州には移送の指令書が届けられず、したがって、移送は行なわれなかった。不運な疎開者たちは、この間ずっと野営し、惨めな生活をして過ごした。2ヶ月の間に、彼らのうち何百人かは、飢えと病気で死亡した。ようやく11月になって、疎開者たちは州から移送されていった。

子供の疎開については、とくに立ち入って言及しておかなければならない。それもまた中央の指令によって実施され、子供を飢えから救うことを目的としていたが、しかし、子供移送の計画と組織が悪く、望ましい結果をもたらさなかった。そればかりか、多くの子供にとっては、疎開は悲劇に終わった。

最初の移送団——子供500人——は、1921年10月にチラスポーリに向かって出発した。そこでは、彼らは農家に振り分けられた。大きな子供はなんとか受け入れられたが、幼児は誰も引き取ろうとはせず、地方当局は、幼児を強制的に振り分けなければならなかった。第二の移送団——子供の数は第一団と同じ——も、チラスポーリに向かうことが指示されていた。しかし、第二団は非常に長い間移送隊が来るのを待たされ、そして、彼らがサラトフで移送列車に一杯に詰め込まれたとき、オデッサに子供を移送せよという指令が到着した。

その後、子供たちは、小さい集団をつくって、ウマニ、マイコプ、キエフ、トゥーラ、オリョール、プスコフ、ヴィテブスク、カシーラに移送された。秋と冬を通じて、マルクスシュタット郡から 1232 人、バリツェル郡から 150 人、ロブネンスク郡から 515 人の子供が、疎開させられた。

1922 年 4 月 13 日の州飢餓者援助委員会幹部会会議では、秋と冬の疎開事業の総括が行なわれた。州国民教育局の局長ゲ・エリベルクは、この会議に出席し、次のように述べた。「州国民教育局のあらゆる資料から判断して、中央政府は春の到来とともに新たに子供を我が州から疎開させようと欲している、と推測することができる。しかし、昨年秋に実施された疎開は極めて不満足なものであったことを、指摘しなければならない。それは、明らかに無計画に実施され、恵まれた状況の県に移送された子供たちは、そこで、農民の間に労働力として振り分けられ、その多くは死亡した。確かに、いくつかの疎開にあっては、良い成果を挙げることができた。それは、子供たちが一定の組織によって引き取られた場合であって、カシーラ、マイコプなどがそうであった。秋と同じような条件で疎開を継続するのか、あるいはそれを拒否するのか、いまや決断する必要がある。」

ゲ・エリベルクの報告の後、州飢餓者援助委員会は、次のような決議を行なった。「秋に実施されたような疎開は受け入れられないことを認め、したがって、そのような疎開は拒否する。疎開する子供の受け入れを希望する一定の組織との合意が得られる場合にのみ、疎開に賛成する。」

州からは、総勢 3660 人が疎開させられた。しかし、すべてが後に帰郷できたわけでは決してなかった。

州が飢饉に見舞われ、誰よりも子供たちが苦しい状態にあり、彼らは飢饉の最初の犠牲になった。したがって、子供たちには大きな注意が払われた。1921 年秋には、都市やいくつかの村で、子供用の食堂や給食所が開設され始めた。

しかし、そうした施設が飢える子供たちすべてに食事を提供するには、労力と資金が十分でなかった。それは、主として、外部から州に到着する食糧が非常に限られた量であり、また極めて不規則であったからである。10月に州飢餓者援助委員会が確保できた規則的な子供の給食は、全体で約1万人分にすぎなかった。飢えていた子供はその何倍もの数であった。こうした厳しい時期に、沿ヴォルガドイツ人州を援助するために、外国の慈善組織が動いた。

8 外国からの食糧援助

すでに1921年8月21日、外務人民委員代理エム・リトヴィーノフは、リガにおいて、ハーバート・フーヴァーが長官を務めていた「アメリカ援助局」

(ARA)の代表と、ロシアの飢餓者への人道的援助に関する協定に署名していた。アメリカ側は、即座に最初の食糧貨車を送ると言明し、フーヴァーは、その際、ロシアへの食糧調達のために毎月120—150万ドルを支出すると約束した。

8月27日、数多くの国の67の慈善組織からなる「国際子供救済同盟」

(MSPD)の当時の代表フリーチョフ・ナンセン〔ノルウェー人〕——有名な北極探險家——は、飢餓者への食糧調達に関するモスクワとの協定に調印した。

10月中葉、「アメリカ援助局」と「国際子供救済同盟」との代表たちは、沿ヴォルガドイツ人自治州を訪ねた。マルクスシュタットとサラトフで交渉が行なわれ、飢餓者援助の具体的措置について検討された。子供への給食を組織化する仕事から開始することが決められた。ナンセンの組織はマルクスシュタット郡を、「アメリカ援助局」はロヴネンスク郡とバリツェル郡を担当することになった。当初は、各郡でそれぞれ8千人の子供に給食し、その後徐々に給食の子供の総数を7万5千人にまで増加させる、ということが計画された。国

国際組織の代表たちは、村や都市の相互援助委員会に対して食糧を引き渡し、後者による子供給食の組織を監督した。給食は、この目的のために特別に開設された食堂で行なわれることになった。そのような食堂は、当初は100ヶ所が予定された。

ソ連邦の中央国家機関とは異なり、国際慈善組織は、迅速に、そして果敢に活動した。文字通り数日のうちに、州に食糧を搬入し始めた。たとえば、「国際児童救済同盟」は、10月27日までにすでに種々の食糧9千ブードをマルクスシュタット郡に運び込んでいた。準備活動はすべて1ヶ月内に完了し、11月21日からは、子供への規則的な給食が「アメリカ援助局」と「国際子供救済同盟」との食堂で開始された

国際組織の代表たちは、実情を十分に知る機会を得、子供援助の規模を緊急に拡大する義務を負うこととなった。「アメリカ援助局」とナンセンの組織した食堂では、すでに11月末に、およそ20万人の飢餓者のうち15歳未満の子供5万3千人に食事が提供されていた。

11月30日、ナンセンは、補佐役とともにマルクスシュタットを訪問した。ロシア電報通信社は、この出来事について、次のように伝えた。「30/XIにナンセン博士、ヴェブステルおよびファルレ博士が、ヴォルガドイツ人州の飢饉の程度を知るためにマルクスシュタットに到着した。彼らは、子供の家、子供食堂、小児病院、孤児収容所を訪れ、近隣の村に行き、飢えに苦しむ家々をまわった。そこには飢えてぐったりした人々や骸骨に似た子供たちが見い出され、それは強烈な印象を与えた。ナンセン隊の医学主任ファルレ博士は、その印象を次のような言葉で雑誌編集者に表現した。“貴国の当地における恐ろしい飢饉の光景はすべて、私がインドで飢饉と闘っていたときに目撃したよりもさらにひどい。”ナンセン自身、疲弊した人々を、そしてさらに餓死した子供や飢餓の光景を、フィルムに撮影した。ナンセンは、子供2万人分の既設の子

供食堂に加えて、さらに1万人分の子供食堂を開設するよう指示した。ナンセンとヴェブステルは、既存の食堂施設には非常に満足した。」

ちょうど同じ時期に、「アメリカ援助局」は、保育所、孤児院、小児病院に収容されていた子供たちのために食糧を追加し、配分した。

1921年末までに、「アメリカ援助局」はロヴネンスク郡とバリツェル郡にそれぞれ子供3万人分の、「国際子供救済同盟」はマルクスシュタット郡に子供5万人分の、食事を提供した。すなわち、外国の組織が全部で子供11万人分の食事提供を引き受けたのである。二つの慈善組織は、1922年4月1日までに（州にとってはもっとも困難な時期に）、子供15万8000人（旧ロヴネンスク郡で「アメリカ援助局」が4万7700人、旧バリツェル郡で「アメリカ援助局」が5万7800人、旧マルクスシュタット郡で「国際子供救済同盟」が4万2500人）の食糧を確保していた。

この4月には、アメリカ人は、トウモロコシの配給パンにより、成人住民の食事を提供しはじめた（マルクスシュタット郡で5万7000人分、ロヴネンスク郡で5万人分、バリツェル郡で6万4000人分、合計18万1000人分）。6月1日からは、「国際子供救済同盟」は、「アメリカ援助局」との合意の上で、後者から旧マルクスシュタット郡を引き受け、そこで成人5万5000人分の食事提供を組織している。

こうして、結局、「アメリカ援助局」と「国際子供救済同盟」は、1922年の春と夏の時期に、成人と子供合わせて33万9000人分の食事を確保したのである。

上記の数字はすべて、統合以前に存在したドイツ人州地域、すなわちドイツ人だけの居住する地域に関するものである。統合後に州に加わった地域を考慮に入れるならば、国際慈善組織の援助の数字はさらに大きくなる。沿ヴォルガ

ドイツ人自治州の第 10 回ソヴェト大会において州執行委員会副議長エス・コロチロフが演説で公表した統計資料を、表にまとめて掲げておこう。

表 3-3 ドイツ人州の飢餓者に対する「アメリカ援助局」と
「国際子供救済同盟」の援助

	飢 餓 者 数	アメリカ援助局と国際子 供 救済同盟の援助（人数）	アメリカ援助局と国際子供救 済同盟の援助を受けた飢餓者の比 率
子 供	203, 760	180, 000	88 %
成 人	272, 634	255, 864	93 %
計	476, 394	43, 5864	91 %

表の数字はすべて、1922 年 7 月の状況を示している。この表にみるように、「アメリカ援助局」と「国際子供救済同盟」は、州の飢餓住民の大半を援助していたのである。

この二つの組織がそれぞれの計画によりドイツ人自治州の住民に食事を提供していた他に、それらの現場の施設を利用して、さまざまな外国の宗教的およびその他の組織団体（キリスト再臨派、クウェーカー教徒など）の寄付した食糧が配られた。そのような食糧は、8 万ブード以上になっていた。

1922 年 1 月からは、ドイツ赤十字社が、沿ヴォルガドイツ人州の飢餓者援助に加わった。1922 年の 1 年間に、ドイツ赤十字社によって、2 万ブード以上の食糧が行政区ごとに発送され、配分された。その他に、大量の医薬品の援助が州になされ、また、ドイツからは、何人もの医師が、州内の疫病、とくにマラリアの駆除に参加した。

沿ヴォルガドイツ人自治州における飢饉との闘いに大きな援助をした人たちに、ドイツやアメリカの亡命ヴォルガドイツ人がおり、彼らは、自分たちが組

織した「ヴォルガドイツ人救援事業 Hilfswerk der Wolgadeutschen」によってそれを行なった。この組織は、1922 年の夏以降に州内での活動を開始し、実際には 1923 年を通じて——そのときは「アメリカ援助局」と「国際子供救済同盟」はすでに規則的な援助を止めていた——、その活動を継続した。「ヴォルガドイツ人救援事業」は、1922 年 9 月だけでも、州全体に 2 万ブードの食糧を配布した。この組織からの援助は、その後もほぼ同じだけの規模で行なわれた。亡命ヴォルガドイツ人は、共同寄付の他に、特定の（主として自分たちが移住する前に住んでいた）村々に、および個々の人々——自分の親類——に向けて、特別小包を届けた。亡命者たちは、食物の他に、衣類、履物、マッチなど、緊急に必要な工業製品をも州に届けた。

州指導部は、「ヴォルガドイツ人救援事業」組織に対しては、非常に警戒心をもって接した。亡命ヴォルガドイツ人は、移住前にはほとんどが富裕な人々であったのであり、当時の非常にステレオタイプの階級的敵意から、そうした亡命ヴォルガドイツ人は飢餓者援助を口実として利用して、新体制と闘うドイツ人村・組織における自分たちの立場を強化しようとしている、と考えられた。

こうして、州執行委員会は、ドイツ人州における「ヴォルガドイツ人救援事業」の活動に非常に無慈悲な制限を加えた。この組織との協力の原則に関する執行委員会の決定事項のうちいくつかを紹介すれば、次のようである。

「——ドイツ人州における「ヴォルガドイツ人救援事業」の基本的活動は州経済全体の復興に向けられなければならない、と考えるべきである。個別的な小包を州に発送することは、一時的で副次的な現象であらねばならない……。

——「ヴォルガドイツ人救援事業」は、ドイツ人州における活動はすべて、ドイツ人州消費組合同盟を通してのみ行なうことが義務付けられる……。

——いかなる場合も救援物資に文献を含んではいけない……。

州消費組合同盟と「ヴォルガドイツ人救援事業」は、その名前がでるような業務はどれについても、相互に特別の契約を結ぶものとする・・・。」

その他に、「ヴォルガドイツ人救援事業」の代表各人に対しては、国家政治保安部（GPU）の州機関による秘密の監視がつけられた。

同時に、州当局は、州復興のために「ヴォルガドイツ人救援事業」を積極的に利用することを必要と認めた。これについては、とりわけ、1923年2月27日付の州執行委員会の次の決議が雄弁に証言している。「「ヴォルガドイツ人救援事業」自体に対する評価はこれまでと変わらないが、しかし、（沿ヴォルガドイツ人州から北アメリカ・南アメリカへの大量移住者の間におけるこの組織の連絡網を考慮して）我々の農業貸付団体（ドイツ・ヴォルガ農業貸付銀行）の債券を上記移住者に広める際にこの組織を十分に利用することを必要かつ有効と認める。」この措置は、その後実施され、有効性を発揮した。外国の亡命者から、国民経済復興のための多額の資金援助を取得することができた。

国際労働者飢餓者援助組織（Mezhraborgpomgolom）によるドイツ人自治州にたいする援助については、とくに立ち入って言及しておかなければならない。この組織は、1921年9月にベルリンで、ソヴェトロシア飢饉地域住民援助委員会国際会議において創設された。主として資金援助が行なわれ、州はその資金で食糧を購入した。この資金の一部は工業の復興に使用された。慈善的な、つまり無償の援助に慣れていた州指導部は、数ヶ月して国際労働者飢餓者援助組織による援助の勘定書が彼らに提示されたとき、文字通り強い衝撃を受けた。後になって州執行委員会がモスクワへのある報告書のなかで気遣いながら指摘しているように、国際労働者飢餓者援助組織との「活動は、あまり成功しなかった。」

ドイツ人州の飢餓者に対する外国援助の問題の検討を終えるに際し、国外から到着した食糧の総量がきわめて大きかったことを、指摘しておかなければな

らない。このことは、古文書資料をゲルマンが分析して整理した表 3-4 から明らかである。表は、外国の食糧援助量は州に到着した国内食糧の総量の二倍であったことを、明白に証言している。国家援助については、それを比較検討するまでもない。それは、順位からして、外国の慈善組織の援助より少ない。

表 3-4 飢餓者の食事のために沿ヴォルガドイツ人州に到着した食糧援助

(1922 年 10 月 1 日現在、単位：ブード)

援 助 の ル ー ト	総 量
国家による調達（播種用穀物を含まない）	187, 791
ゴメリ県、ブリャンスク県、ヴィテブスク県 で集められた寄付	387, 506
ドイツ人州消費組合同盟による商品交換	212, 226
ロシアの他地域のドイツ人住民からの寄付	10, 000
国内の食糧援助の総計	797, 523
外国の慈善組織による援助	1, 562, 012

以上述べてきたところから、次のような確かな結論を得ることができる。すなわち、外国の慈善組織、とくに「アメリカ援助局」と「国際子供救済同盟」の援助は、沿ヴォルガドイツ人自治州の大半の住民を餓死から救う上で決定的であった。これらの組織の支援がなかったならば、恐ろしい破局がきただろう。それによって、ドイツ人自治州の住民すべてが死に絶えたかもしれず、ソヴェト政府と州指導部は、状況を制御できず、飢饉を乗り切ることはできなかったであろう。

したがって、外国の組織が慈善事業によってその反ソヴェト活動を隠蔽しているかのような、そうした外国の組織の裏表ある政策という、長年にわたってソ連の歴史学文献にみられた考えは妥当しいと言わなければならない。ちなみに、ゲルマンは、州に対する外国の援助および州内における外国組織の代表者の所在について、そのすべての時期にわたる国家政治保安部の秘密作業報告

を分析している。この作業報告は、諜報員の資料に基づいて作成されているが、それによれば、秘密諜報工作員が聞いたという、飢饉を拡大したとして共産党員やソヴェト権力を非難した「アメリカ援助局」と「ヴォルガドイツ人救援事業」の代表者個々人による発言を別にすれば、「アメリカ援助局」、「国際子供救済同盟」、「ヴォルガドイツ人救援事業」などの組織はドイツ人州においていかなる反ソヴェト的地下活動をも行なっていなかったといことを明確に立証することができる。先のような発言は、一定の根拠をもっており、ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国の内政への干渉であったが、しかし、そうした発言から具体的な反ソヴェト活動までには大きな距離があったのである。

9 援助物資輸送の諸問題

外国の慈善事業は正当に評価されなければならないが、しかし、それがドイツ人自治州の飢饉問題のすべてを解決し得なかったのはもちろんであり、さまざまなルートで得られる国内援助にいたっては尚更であった、ということを考慮すべきである。州に到着した食糧援助量を総計し、それを飢餓者人口で叙すると、飢饉の全時期を通じて飢餓者一人当たりの食料は平均して5プード（80キログラム）ほどであった、ということになる。この計算からすれば、飢餓者各人は（これも平均して）食糧を月に約3キログラム、週に750グラム、日に100グラム強、受け取っていたことになる。州、郡そして現場に到着する食糧援助はまちまちで不規則であったことを考慮するならば、時期によっては飢餓者にとって何も食べるものがない日が数多くあった、ということは疑いない。

州および現場に到着する食糧援助がまちまちで不規則であった原因は、鉄道輸送の不備、一連の関係官庁や鉄道駅における混乱、家畜飼料の欠乏、家畜の

餓死にあり、その結果、到着した食糧を鉄道駅から指定の場所へ運搬するのが順調に行かなかったのである。

鉄道については、とくに立ち入って述べておかなければならない。貨車、燃料などが十分でなかったばかりでない。国内飢餓地域への援助事業にとって大きな損害を与えたのは着服、贈収賄であり、贈収賄の規模は甚大であった。その証拠として、州執行委員会がこれに関して特別に準備した中央政府宛報告書を引用しておこう。そこには、商品交換業務に従事していた農村相互援助委員会の代表と州の諸組織は貨車を出してもらうために駅長に賄賂を贈らざるを得なかった、ということが指摘されている。たとえば、ニデルモンジュ村の農民は貨車 13 台のためにポクロフスク駅の駅長にバター 1 プードを、ズヴォナレフ・クートの住民は貨車 4 台のために 100 万ルーブリを渡した。「貨車を出してもらう際にこのような賄賂がなければいかなる組織も事を開始することはできなかったであろう、と容易に言うことができる」と、報告書のなかで指摘されている。サラトフ第一駅からの子供疎開の際には、車両を予定通りに出してもらうために、最初のときはバター 10 フントを、第二のときにはソーセージ 10 フントを渡さなければならず、そして、第三のときには、鉄道従業員への賄賂として山羊が引き渡された。

国内の諸地域から沿ヴォルガドイツ人自治州に向かう食糧積載列車の路程においては、いくつかの駅で蒸気機関車が脱線し、列車は立ち往生し、賄賂（10 万ルーブリほどの現金か食糧）を渡してようやく列車はさらに走り続けることができた。しかも、こうしたことは、一回の運行で何度も生じた。「農民たちは、こうした事情に絶望し、この形態の相互援助を拒否している。というのも、食糧はこうした際限ない賄賂によって現地で購入するのと同じぐらい高くつくからである。」

報告書には、貨車の食糧の絶えざる着服について指摘されている。実際、指定の場所に到着した貨車 1 台につき、100 プード以上の不足がみつかった。チモフェーエフカ駅ではさらにひどいことが起こっていた。穀物積載貨車の脱線を修理したら、その後、何百プードものライ麦が消えていた。外国慈善組織による貨物も窃盗者に注意しないわけにはいかなかった。「到着する荷箱は壊れている。中身は半分は盗まれている。」

報告書の最後に、州執行委員会は、正当にも、次のように指摘している。

「こうした悪事——とくに鉄道における悪事——と必死に戦わなければ、飢餓住民に対する援助は大部分がねこそぎ奪われてしまうであろうし、そうであれば経済の復興など語ることもできない。」非常に厳しい措置も取られ、盗人や収賄者に対しては「戦時共産主義時代の法律によって」対処したが、世の中全体が荒廃して生活にもっとも必要なものが欠乏していたなかでは、そうした措置はしかるべき効果を挙げることはなかった。

1921 年から 1922 年にかけての冬、厳しい燃料問題が起こった。ところによっては、燃料不足から公共食堂や給食所が廃止されることさえあった。

10 市場取引

飢饉に苦しむ州の状況描写は、当時のさらに一つの現象、すなわち投機と市場取引について言及しなければ不完全であろう。奇妙に見えるかもしれないが、きわめて困難な何ヶ月間にあってさえ、マルクスシュタットやその他の都市と大きな村々では、市場が機能しており、賑やかな商取引・交易が行なわれていた。その際、食糧価格は、当然のことながら天文学的数字であったが、農機具などの物品の価格は極めて乏しい数字であった。たとえば、鉄製有輪鋤（ブルーク）は 10 万ルーブリで売られていたが、この額ではせいぜい 5 人家族の 2

日分の食事に十分な穀物を購入することができただけである。市場取引は、州執行委員会の決定に基づき、新経済政策（ネップ）の限度内において公的に許されていた。商人は、国家から特許証を受け取っていたが、そのためには15—20万ルーブリという、それほど高くはない額を支払っていた。食糧の取引を行っていたのは主としてヴォルガ右岸のロシア人農民であった、ということを指摘しておかなければならない。

市場取引に関しては、州執行委員会や州飢餓者援助委員会の会議で、激しい議論が一度ならず行なわれた。市場反対者は、市場の閉鎖を、あるいは少なくとも商人の取引額の厳しい制限を要求した。市場反対者の一人、州チェーカー（反革命・サボタージュ取締全ロシア非常委員会）の飢餓・疫病闘争三人委員会ゲ・シュナイデルは、自分の立場を次のように表現した。「新たな経済状況にあってもっとも強力な機関は、飢餓者のための「搾取」を完全に意のままにできる金融機関であるが、何もせず、市場（バザール）には、協同組合の代わりに、そして新しい経済的方針により、穀物、焼き菓子、煙草、その他必要品を備えた店舗がいくつも出ている。新経済政策は、望む者は誰でも金持ちになることができ、その能力をもつ者は飢えに苦しむ勤労住民からすべてを巻き上げることさえできる、というために存在しているかのようなものである。金持ちになる可能性が一定の人々に与えられるとすれば、我々は、そうした可能性を与えることによって、飢えて衰弱し死に瀕している農民の子供・勤労者のために我々が必要とする物を彼らから徐々に巻き上げることが可能にしておかなければならない。」

実際、飢饉に苦しむ州内における市場活動は深刻な道徳的損失を伴ってはいたが、しかし、それは、非常に高価であれ、少なからぬ数の農民を飢饉から救うことを助けた。

11 飢饉の激化と播種作業——1922年初頭——

すでに指摘したように、ドイツ人自治州における飢饉のピークは、1922年の、冬から春にかけての数ヶ月であった。1月には、援助物資の貨物の流れはその量が減少しはじめた。飢饉が激化する状況のなかで、食糧調達量の減少は、かろうじて惨めな生活を送っていた住民の大量餓死をひきおこしかねなかった。この不安については、1922年1月12日の州飢餓者援助委員会の会議において語られていた。食糧を搬入する中央政府と諸県にたいして新しい「補助機関車」を即座に送ることが決定された。モスクワには、州と州飢餓者援助委員会との指導者ア・モールが再び派遣された。ア・モールは、中央飢餓者援助委員会において、率直に、「中央から州に与えられる食糧援助の指令は、実を言うと、実情に合っていません。というのも、今日まで食糧援助の大部分は受け取られておらず、そのような指令は事実上空文に終わっているのです」と述べた。これに対する回答として、そのような状況の主要な原因は不良な輸送作業や食糧人民委員部支所における混乱などにある、と説明された。即刻に状況を改善する、という約束がなされた。

モスクワでは、ア・モールは、ゴメリ県とヴィテブスク県の代表者に面会し、州内への食料調達の問題について討議することができた。ヴィテブスク県からの援助は、どこよりも少なかった。したがって、ア・モールは、ヴィテブスクをも訪問した。しかし、彼は、そこで、ドイツ人自治州に援助していた県自体がドイツ人州よりわずかに良い状態にあるにすぎない、ということをはっきりと確信することとなった。というのも、そうした県に課せられていた食糧税は、農民に少しの余剰の保持をも実際許さないほどの規模であったからである。それでも、県執行委員会・ロシア共産党県委員会・県労働ソヴェトの合同会議で行われた、沿ヴォルガドイツ人州の実情に関する彼の報告は、同情と支持を呼

び起こした。ヴィテブスク県がどれだけ出来るかが検討され、州への食糧調達量の増加が決定された。

このようにして、ア・モールの旅は無駄ではなく、一定の積極的成果をもたらした。1922年2月より、食糧調達量は新たに増加しはじめた。これは、州内の状況が悪化し続けていたので、時宜に適っていた。ドイツ人自治州の状況が悪化し続けているという判断は、1922年の1月28日から2月1日にかけて開催された第8回州ロシア共産党代表者会議においてなされた。

「1、代表者会議は、州が厳寒の悪夢の何ヶ月間を生き延び、食糧の最後の残余を食い尽くし、現在では、全住民の食糧備蓄が完全に枯渇し、住民のあらゆる相互援助も尽き、きわめて危険で恐ろしい状況の到来に脅かされている、ということを確認する。

2、飢饉が住民に及ぼしている直接的影響としては、代表者会議は、住民の極度の衰弱という一般的現象と労働力の低下、大量の餓死、住民各層における広範なチフスの流行、住民の絶えることのない、広範な拡大傾向を示している州からの脱出を確認する。

3、同時に、州の経済、とりわけ農業生産と牧畜という主導部門における活力の完全な喪失という危険が、日増しに拡大している・・・。

6、飢饉の破壊的影響によって・・・、クスターリ工業〔家内工業〕はドイツ人州の経済力が全般的に衰退・崩壊するなかで独力で発展していく力を持たず、貴重なクスターリ工業がほぼ完全に麻痺してしまい、大量の飢えに苦しむ働き者のみが生まれ、州の失業者数が増加している。」

党代表者会議は、「飢饉の危険な状況と闘う最も重要な作業」として、春播きの実施を課題として定めた。というのも、「そうでない場合には、州は、翌年にも再び国家の食客となる。」春播きの準備は、事前に始められていた。すでに1921年12月、州執行委員会は、農業人民委員部との間で、小麦、大麦、

燕麦、キビ、向日葵、トウモロコシの播種用種子を総量 80 万ブードほど、ジャガイモの種子を 70 万ブード、ウマゴヤシの種子を 1600 ブード、州に調達してもらおうという約束を取り付けていた。その時に、州執行委員会の会議では、種子の受入れ・配分・輸送にかかわるあらゆる問題が検討された。

しかし、1922 年 2 月になって、中央が約束した多くは遂行されないだろうということが明らかになった。とくに、州は、ジャガイモの種子については全く拒否され、春播き種子もわずかの量しか到着しなかった。中央からの種子調達計画は失敗に終わるということが、ますます明らかとなった。状況が極端な措置に走らせた。州執行委員会幹部会は、州飢餓者援助委員会を通じて飢餓者援助のために到着した播種用穀物は種子ファンドに没収する、という決定を下した。同時に、中央飢餓者援助委員会には、「中央の指令により州のために予定されている種子はすべて遅れずに届けられるよう」、請願書が提出された。

この 2 月には、ドイツ人州における播種作業（キャンペーン）をより良く組織するために、イ・シュヴァーロフを頭とする「播種三人委員会（トロイカ）」が設置された。同様の三人委員会は、さまざまな地域で設置されていた。その他に、州執行委員会は、その委員のなかから、各地域の播種作業実施全権委員を任命した。

中央からの種子は、1922 年の 3 月 14 日に、すなわちまさに播種作業期間（キャンペーン）中に、到着し始めた。意気盛んな農民は、種子を受け取り、できるだけ素早く行動した。牛を使って耕し、自ら鋤と馬鍬で仕事した。種子集積所から播種用種子を運搬するのに、農家に残されていた馬ではかろうじて間に合うという状況であった。その際、衰弱した馬が運搬できる積荷は、1・5—2 ツェントネルほどであった。種子を運搬した馬は疲れ果て、耕作に使うことはできないほどであった。役畜を働かせることができるように、州執行委員会は、飼料用種子の一部を役畜の飼養のために使用することを決定した。

1922 年春を通じて、春播き穀物は、約 24 万 4000 デシャチナの土地に、つまり 1921 年のほぼ 4 倍の土地に、播種された。中央は、約束の種子量の約 76% を州に調達した。不足の種子は、さまざまな方法で補充しなければならず、そのなかには、すでに言及したような異常な手段もあった。しかし、いずれにしろ、播種作業期間が終わるまでに州の農民の間に配分された種子量は、小麦 60 万 4000 プード、大麦 5 万 7000 プード、キビ 5 万 8000 プード、向日葵 6 万 4000 プード、トウモロコシ 3 万 プード、燕麦 1 万 9000 プードであった。播種されなかった種子が貨車 10 両以上あったが、それは、現金と引き換えに農民に売られた。遅れて到着した種子は、州の食糧機関に引き渡された。

このようにして、春の播種作業は、秋の播種作業と同様、全体として成功裡に実施された。州の指導部および全住民は、秋には良い収穫があり飢饉は終わるであろうと期待したが、それは根拠なくはなかった。天候がこれに幸いした。電報通信社の定期報告のなかで、「農民は、信頼と期待をもって将来を見つめている」と指摘されていた。

12 危機の克服に向かって

将来の収穫に対する楽観的予測にもとづき、そして、ソヴェト共和国の中央諸機関の指令に従い、州飢餓者援助委員会は、第 2 回州執行委員会総会の決議により、1922 年 7 月以降、その活動の方向を、飢餓者への食糧確保ということから、破壊され荒廃した沿ヴォルガドイツ人州の経済を再興するために州内の食糧を活用するということに、本質的に転換した。そのために、州飢餓者援助委員会は、委員会が受け取った食糧をさまざまな経済的機関・組織に引き渡すようになった。そうした機関・組織がその援助により必要な設備・原料を買い入れ、作業所・設備を復興し、機械の修理などを可能にせんがためであった。

その後の何ヶ月間のうちに、州飢餓者援助委員会による活動方針のこの転換はさらに明確にされたが、良い収穫によって州の飢餓が徐々に軽減されたことがこれに幸いした。1922年9月8日の州経済審議会の会議で指摘されたところでは、穀物の総収穫量は7000万プードを超えることが予測されていた。

1922年10月21日、州執行委員会は、全ロシア中央執行委員会の決定に基づき、州飢餓者援助委員会の解散とそれに代わる州飢饉影響清算委員会（oblkomposledgol）の設置とを決議した。委員会の名称そのものが、その活動の目的を明らかにしていた。

概して言えば、1922年秋には自治州は矛盾した不透明な状況にあった。一方において、悪くない収穫によって、自治州は、恐ろしい最悪の飢饉状態を克服することができた。州のあらゆる生活領域を襲った深刻な危機の克服が開始される、という動きが見られた。こうした好ましい徴候は、完全に零落し荒廃してしまったドイツ人州にあってはいまだ弱かったが、ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国の若干の指導者によっては過度に楽観的に受け取られた。しかし、州執行委員会が地区執行委員会宛の書簡のなかで指摘しているように、中央では「公式には飢饉はほぼ終わったとみなされ」、「外部援助の吸引力は減退している」ということにより、「州のとくに困難な状況」はかえって深化していたと言える。

その他に、実際、住民は、飢餓者援助委員会のルートによる食糧を受け取ることを止め、また、9月1日以降は、アメリカ援助局や国際子供救済同盟といった外国組織は、住民——そのなかには子供も含む——への規則的な給食を打ち切った。そうした外国組織は、9月の間は、残った食糧を帰還した難民、子供の家、病人に配給した。ゴメリ県、ブリャンスク県、ヴィテブスク県といった指定諸県からの食糧援助は来なくなった。州は、実際、再び完全に食糧を自分で確保できるようになった。

国家援助は、小規模に播種用穀物だけで行なわれた。州に照会のあったアメリカのライ麦 30 万プードのうち 8 万 5000 プードのみが、ノヴォロシイスクからマルクスシュタットに輸送された。しかし、この援助も、播種地を 25% 拡大すべきだという州の義務に応じてなされたものであった。この穀物は、州執行委員会の決定により、自分の播種地を 25% 以上拡大した農民にのみ引き渡された。その他の農民の土地は、彼ら自身の貯蔵穀物によって播種しなけりばならなかった。

13 重い食糧税負担

上記の農民奨励策は、その効果を挙げることはなかった。1922 年秋に播種された秋播き畑総面積は 18 万 6733 デシャチナであり、それは、前年の 1921 年の数字を 10% も超えるものではなかった。こうした状況をひきおこした主要な原因は、再びパン無しになるのではという農民の恐れにあった。というのも、すでに 8 月に中央からは、ようやく落ち着き始めた小さな州にとっては法外に多額な食糧税の通達があったのである。ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国の人民委員会議の決定により、沿ヴォルガドイツ人州に対しては、10 等級の収穫目標うちの第 4 等級が要求され、食糧税の総額は 540 万プードと定められた。しかし、州は飢饉を生き延びたばかりであるということを考慮し、州には 50% の減額がなされ、目標の食糧税額は、270 万プードと定められた。ただし、この数字も非現実的であった。州執行委員会は、すでに何度も、困難な事態にぶつかっていた。一方において、委員会は、食糧税義務を確実に遂行しなければならなかった。この目的のために、食糧税の徴収は「きわめて重要で緊急の実際問題」であると言明され、地区 (kanton) の責任者全員にたいして、「貧困、零落、納税不能、将来の飢饉を理由とした愁訴に屈しない、食糧税徴

収の確固たる戦術」の導入が指示された。食糧税の徴収に際して、一連の組織的・行政的措置が講じられた。地区には食糧税徴収機関（prodorgan）が設置され、州食糧人民委員部がそれを主導した。市場は閉鎖され、農民による州外への穀物持ち出しが禁止された。

他方、州執行委員会は、規定の食糧税義務の遂行は不可能であると認め、ソヴェト共和国の中央諸機関に対して、収穫の目標等級の引き下げ、したがって食糧税の減額について、文字通り請願詰めにした。全ロシア中央執行委員会宛に送付された書簡のなかでは、次のように述べられていた。「・・・総収穫量とそれに定められた食糧税額とを単純に比較するならば、州はその収穫量の47%を納入しなければならないことになる。これは、州にとっては、1919—1920年の農産物徴発制度の改訂版であり、本年の乏しい収穫の他には住民には何の備蓄もないので、なおさら厳しかった・・・。ソヴェト権力は、1デシヤチナ当り13—16プードの収穫につき7プード20フントを納入させられる農民に対して、自らの誤りを正さなければならない。」州執行委員会は、さらにまた、州は「平均以下の収穫しかない」として食糧税をまったく免除するか、少なくとも州の収穫目標を第2等級以下に評価するように、と請願している。

州の運命にとって重要なこの問題の解決のために、（すでに何度かあったが）再び、ア・モールが中央に派遣された。彼は、ある成果を得ることに成功した。収穫目標等級の引き下げという州の請願は公式には拒否されたが、しかし、州に対しては、秘密裡に、食糧税は第2等級で納付し、残余の徴収量を州内の必要のために使用することが許された。中央のこの秘密の指示に基づき、州執行委員会は、食糧税の総額を30%引き下げ、188万8000プードまでにするという決定を下した。

食糧キャンペーンの実施過程においては、農産物徴発制度の時期と同様、強制がなくはなかった。たとえば、マルクスシュタット地区の責任組織者ア・シ

ユナイデルは、1922年10月6日、州党委員会に対して、「何らかの圧力なしに徴収することができた食糧税は70%にすぎなかった」と書き送っている。彼は、また、地区北部のいくつかの村では「飢餓の兆候が再び現われ、物乞いが増加している」、と指摘している。マルクスシュタットの通りには、「飢えた、裸同然の子供たちが見られる」。ア・シュナイデルは、同じ書簡のなかで、飢餓と闘う諸委員会の活動が不十分であることに注意を向けている。「こうした委員会の活動は全く寝入っているかのようであり、そうこうしているうちに、一再ならず飢餓と闘わなければならないでいる。」

食糧税の強制的徴収の際に農民に対して肉体的暴行が加えられたという事実については、ア・モールとイ・シュヴァブが州視察のときに目撃している。彼らは、食糧税徴収機関の代表各人のこのような行動を厳しく非難した。州執行委員会は、地区執行委員会に対して、「食糧税徴収の際の恥知らずな行動および「人民委員の」非常識な行為はどのような側からのものであれ無条件に阻止すること」を要求した。

しかし、この方針は、その後、州執行委員会自身の決定により、一度ならず撤回された。状況が州執行委員会をそうさせた。1922年11月9日の会議において食糧税徴収キャンペーンの進行状況が検討された際、いくつかの地区は税徴収においてひどく遅れを取っており、食糧キャンペーンは全体として失敗している、ということが指摘された。州執行委員会は、非常に仮借ない決定を下した。その決定によって、税徴収の遅れた地区の指導者には「汚職による仮告訴」が行なわれ、彼らは、「今後食糧税納入の改善のために断固たる処置が取られない場合には、州執行委員会は告訴資料を革命裁判所に送付するであろう、という警告を受けた。州執行委員会は、また、「許しがたく怠慢な食糧税徴収という罪を帰せられた人々は即座に裁判に付すべき」ことを要求した。「国家税の義務はそれが第4等級により完全に遂行される時に完了したものと見な

することができる、と解釈される」という最後の決定項目は、特別の注意に値する。この規定の存在により、州執行委員会は収穫目標等級の引き下げに関する中央の秘密決定を地区の権力機関には通達していなかった、ということになる。この規定を付することによって、明らかに、一方においては食糧税徴収をより確保し、他方においては州内に大量の食糧を備蓄することが意図された。

規定がどのようなものであれ、この計画は実現される運命にはなかった。食料税の徴収活動は総じて困難であり、農民に対する悪名高い「圧力」が再び日常的現象となった。しかし、農民は、いましがた収穫したわずかな備蓄があるとはいえ、これまでの年と同様、自分のところにある物以上を供出することはできなかった。1922 年の秋、沿ヴォルガドイツ人州における食糧税は、実際、再び農産物徴発制となった。こうして力づくの穀物徴集方法が取られたが、それでも 1922 年末までに徴集し得た穀物量は 130 万プードに過ぎず、それは規定量の 3 分の 2 をわずかに超える量でしかなかった。

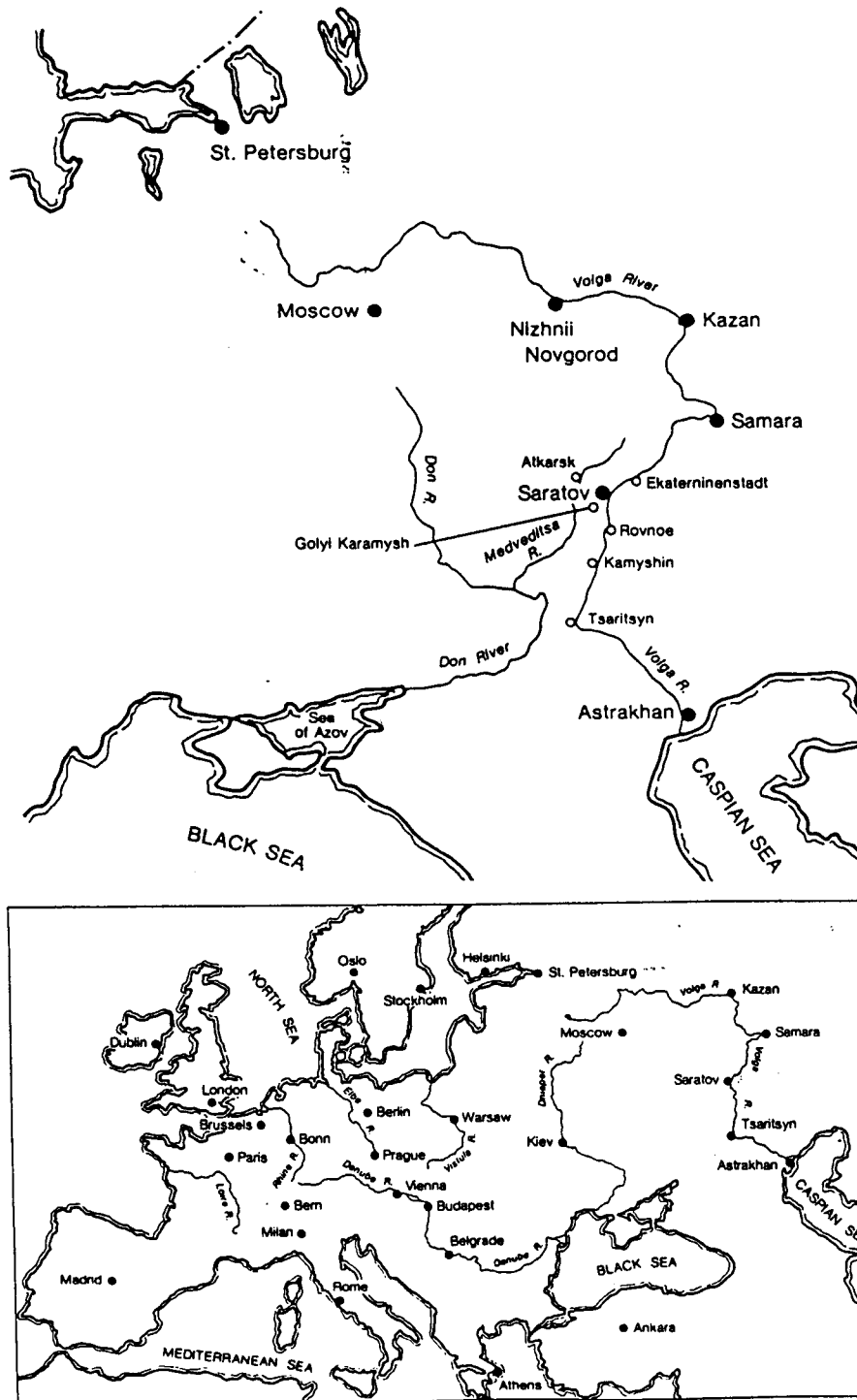
食糧供給がいまだ確保されていなかった州にとっては、このような食糧税徴収は無駄ではなかった。1922 年から 1923 年にかけての冬には再び飢餓が生じ、それは州の住民の 25% を襲った。そして、中央は、再び、州を援助せざるを得なかった。1923 年春、州に対して、66 万 336 プードの播種用種子が貸付けられた。農民は、さまざまな穀物を 33 万デシャチナ以上に播種した。しかし、天候により彼らの計画は何度も修正された。秋播き作物の収穫は非常に悪かった。秋播きライ麦が穀物のなかでは中心的位置を占めていたので、1923 年の収穫全体は豊かなものとはならなかった。中央は州に対して第 1 等級の食糧税徴収量を課したが、何度か減額がなされた。それにもかかわらず、州の農業税の総額は 207 万 8580 プードと定められ、それは 1922 年よりも多かった。その徴収には、再び、それまでの年におけると同様、緊急措置が取られた。その結

果、1923年から1924年にかけての冬に飢えに苦しんだのは、州の住民の15%ほどであった。1924年の不作は、自治州の食糧状況をかなり悪化させた。

こうして、ドイツ人州とその窮境にある住民にとっては、ますます、飢えと貧困の境での生活が永続的となった。それでも、沿ヴォルガドイツ人自治州は、1921—1922年の最悪の飢饉を克服し、復興に向かって、非常に漸進的な、複雑で矛盾した道を歩み始めた。

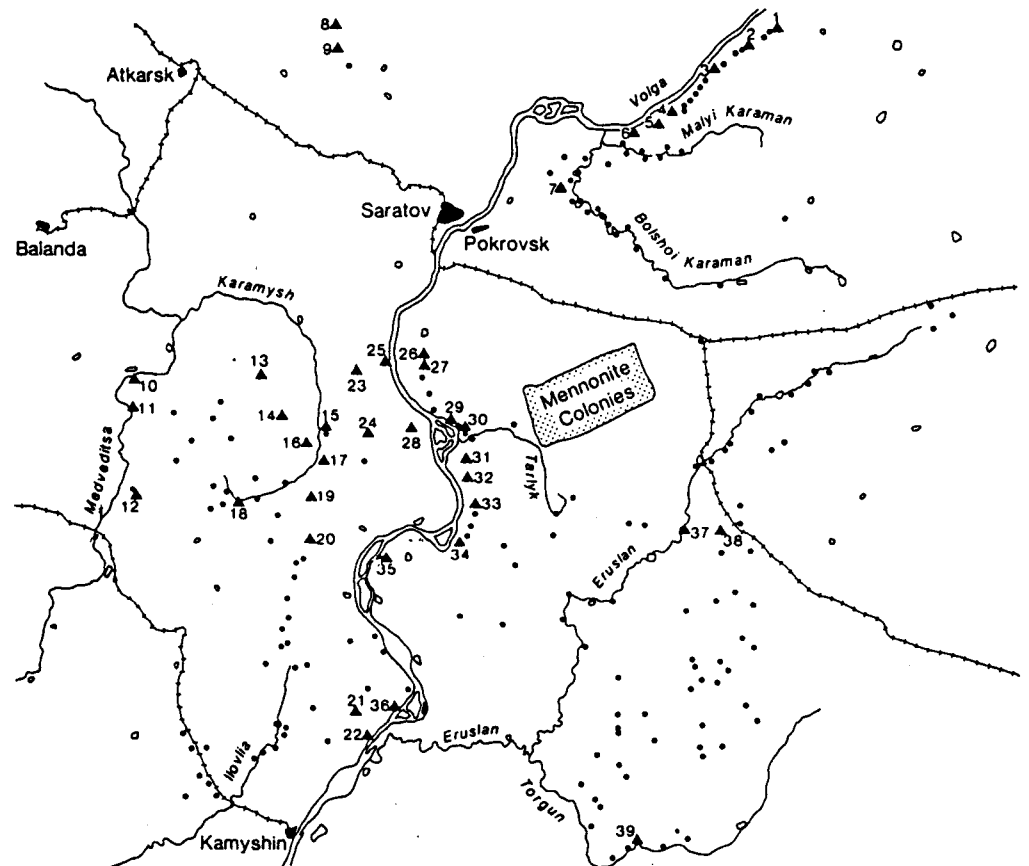
注 本章はA.A.German,Nemetskaya avtonomiya na Volge,1918-1941, chast' 1, Avtonomiya oblast', 1918-1924, Saratov, 1922, str.113-147. に依拠している。

図1 ヴォルガ流域



出所 : James W. Long, From Privileged to Dispossessed, The Volga Germans, 1860-1917, Lincoln/London, 1988, p.xvi.

図2 サラトフ、サマーラ地方のドイツ人入植地



- | | | |
|--|--------------------|---------------------|
| ● Volga German Settlements | 15 Popovka | 33 Krasnopol'e |
| ▲ Settlements frequently cited in text | 16 Gololobovka | 34 Rovnoe |
| 1 Schaffhausen | 17 Ust' Zolikh | 35 K. Krasnorynovka |
| 2 Basle | 18 Pochinnoe | 36 Ust' Kulalinka |
| 3 Tsug | 19 Lesnoi Karamysh | 37 Eckheim |
| 4 Orlovskaiia | 20 Rossoshi | 38 Friedenfeld |
| 5 Obermonzhu | 21 V. Dobrinka | 39 Alt Weimar |
| 6 Ekaterinenstadt | 22 N. Dobrinka | ● Russian Cities |
| 7 Tonkoshurovka | 23 Talovka | ○ Russian Villages |
| 8 Iagodnaia Poliana | 24 Golyi Karamysh | |
| 9 Pobochnoe | 25 Sosnovka | |
| 10 Grechinaia Luka | 26 Kazitskaia | |
| 11 Med. Krest. Buerak | 27 Berezovka | |
| 12 Linevo Ozero | 28 Sevastianovka | |
| 13 Norka | 29 Iablonovka | |
| 14 Splavnuvka | 30 Tarlyk | |
| | 31 Skatovka | |
| | 32 Privalnaia | |

出所 : James W. Long, From Privileged to Dispossessed, The Volga Germans, 1860-1917, Lincoln/London, 1988, p.5.